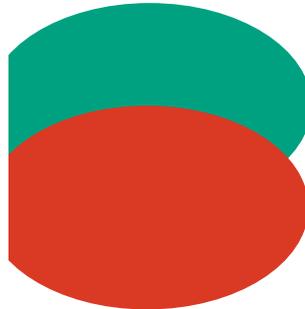


20151118

絵本学会 NEWS No.55

発行：絵本学会
発行日：2015年11月18日
編集：絵本学会広報委員会
絵本学会事務局：〒164-8676 東京都中野区本町2-9-5
東京工芸大学 芸術学部 陶山研究室気付
E-mail office@ehongakkai.com
http://www.ehongakkai.com



絵本学会

会長あいさつ
第18回絵本学会大会報告(1) 研究発表・作品発表
絵本学会第18回定期総会報告
2014年度絵本フォーラム報告
事務局からのお知らせ
お知らせ(2015絵本フォーラム、絵本研究会)
日本絵本研究賞、第19回絵本学会大会のお知らせ

会長あいさつ

「原点に立ち戻る」

絵本学会会長 松本 猛

絵本学会は1997年に設立され、今年で18年目になります。今回の大会で選ばれた理事は今後3年間で任期としますので、3年目の2017年には設立20周年を迎えます。

設立10周年の時、大会実行委員長だった今井良朗氏は、大会のまとめのなかで「この10年、異なった研究分野の交流によって、ようやく絵本が多様な研究の基盤を背景に成り立っていることが確認されたのではないのでしょうか」と述べました。それは子どもとの関連の中で絵本をとらえる学問領域もあれば、美術の一ジャンルとして絵本を考える学問領域もあり、それらが、ともに認め合う中で絵本をとらえられるようになってきた、ということの意味しているのでしょう。

これまでの大会では様々な分野からの研究発表が積み重ねられ、2011年には中川素子氏をはじめ多くの絵本学会員らが執筆協力した『絵本の事典』がまとめられました。学会設立当初、絵本作家の太田大八氏が提唱していた「絵本学」という分野がようやく確立されようとしているのかもしれませんが。

絵本学会の会員数は10周年の時よりも100人以上も増え、現在は500名を数えるまでになっています。たしかに、絵本の研究はこの18年間で層も厚くなり、確実に前進してきたといえるでしょう。

しかし、500名の会員の中で、作家や編集者は決して多くはありません。それどころか、設立当初の作家会員のなかには退会した人々もかなりいます。太田大八氏は、「絵本学」と同時に、多様な絵本の関係者が集う「フォーラム」としての絵本学会も提唱されておられました。研究の分野では大きな前進がありましたが、いろいろな人が集うフォーラムとしての機能は十分とは言えないのが現状です。

この3年間の大きな目標としては、研究活動のさらなる発展はもとより、設立当初の理念に立ち戻り、絵本を取り巻く多様な人々が集える場としての絵本学会を目指したいと思います。それは、研究者だけではなく、作家や編集者などの制作現場にいる人、また、子どもに絵本を手渡す側の保育者や学校関係者、あるいは、美術館員や図書館員のような「場」を通して絵本とかわりを持つ人々、そして、多くの読者たちにとって、それぞれに価値ある学会にするということです。

そのためには、絵本にかかわる多様な人々が関心を持つテーマのフォーラムの開催、また、もう一步踏み込んで専門的に絵本を考える研究会の充実、さらに、絵本学会の活動を、学会の外にも発信する機関誌「絵本 BOOK END」、広報の活動が重要になります。

とくに、絵本の評論活動については、「PeeBoo」*が1998年に終刊になって以来、評論の発表の場がきわめて限られてきています。「絵本 BOOK END」が一定、その役割を担うことができるならば、作家や編集者などの、学会への関心が高まるでしょう。また、今年度の総会で発表したように、日本絵本賞の中に「日本絵本研究賞」を絵本学会が中心になって創設することになりました。詳細については理事会の中に特別委員会を設けて検討してまいります。研究や評論活動の活性化につながるようなものにと考えております。

設立20周年までの3年間の間に、他学会とは違う多様な人々が集う場という特色を持っていた絵本学会の原点を見つめ、さらなる発展を目指したいと思います。会員諸氏の学会への積極的参加を心から期待しております。

*「PeeBoo」 太田大八氏を中心に1990年から1998年まで刊行された季刊絵本情報誌。毎回違った絵本作家が責任編集や特集企画を担当した。

『絵本』という交差点

絵本学会第18回大会は、2015年5月30日(土)、31日(日)に東京都中野区にある東京工芸大学芸術学部中野キャンパスを会場に開催された。本大会では、会員132名、一般45名、学生127名、合計304名の方にご参加いただき、盛況のうちに2日間の大会を終えることができた。開催地が大学であったため様々な教育機関へ本大会の情報が伝わったようで、多数の学生参加者が来場したと、その所属大学が全国より19校におよんだことは特筆すべきことといえる。この多数の学生参加者の状況から「絵本」という学術研究のテーマに対する期待の高さ・関心の広がりを感じられた。本大会実行委員会が志した「絵本は研究のテーマとしても自己表現の方法としてもさまざまな立場から関わっていくことができる」ということを見つめなおそう、絵本の根本的な魅力を改めて考える場所としての大会にしよう」という運営方針が伝達でき、この話題に自発的に加わっていけるという可能性を広く示せた結果であると振り返っている。

上記のような運営の方針から、本大会のテーマは、いろいろな立場から絵本を楽しみ、多角的な視点で考え、絵本の広がりや再認識する機会になればと願って「『絵本』という交差点」となった。一冊の絵本を構成する絵やテキストやブックデザインや編集や、読者などといったそれぞれの要素が行き交う場所というイメージから大会メインビジュアルを作成し、シンボルとして各種メディアで使用した。

大会初日には、オープニングトーク『いろいろな私が出てきます』に、古川タク氏(アニメーション作家/イラストレーター)、加藤久仁生氏(アニメーション作家)、石津ちひろ氏(作家/詩人/翻訳家)が登壇し、それぞれの作品制作について、また作家と画家のコラボレーションのおもしろさについて語り合っていた。古川氏、加藤氏のアニメーション作品の上映や、石津氏の読み聞かせや即興アナグラムの披露など、和気藹々とした雰囲気でのオープニングとなった。

続いて猪熊葉子氏(児童文学研究家/翻訳家)を招いての基調講演『絵本作家と時代とのかかわりーピアトリクス・ポター絵本を例に考える』が行われた。子どものための文学研究者として



● 大会受付前のスタッフミーティング

これまでこの分野を開拓し後進を導き続け、翻訳家としても多数の英米児童文学に関わっていた猪熊氏の登壇が叶い、「そもそも絵本とは何なのか」「絵本とは誰が誰に手渡そうとする表現なのか」「現代のクロスオーバーフィクションの様相に照らした絵本の特性とは何か」など、瑞々しく鋭い考察のダイナミズムを参加者が共有する、意義深い時間となった。

1日目のプログラム終了後、総会開催。その後に会場を地下のラウンジに移して交流会を開催し盛況であった。懇親の時間の中では会長あいさつ他、絵本学会に対する長年のご功績に感謝して、今井良朗会員よりお言葉をいただき、続けて、次回大会開催校となる京都女子大学より川勝泰介会員よりご報告もいただいた。また、オープニングトークの登壇者である古川氏、加藤氏、石津氏のご参加もいただき、著作へのサイン会にも応じていただき、こちらもたくさんの参加者に喜ばれた

大会2日間を通じて行われた研究発表は16件の応募があり、すべて採択された。個々の研究内容は前大会と同様に、作家作品研究、保育・教育実践、児童文化、表現制作など多岐にわたっており、結果として絵本学がカバーする領域の網羅性が実感された。作品発表には10件の応募があり、すべて採択された。2日目にはギャラリートーク形式のフリーディスカッションを行った。様々な表現形式による作品が並び、ディスカッションの時間にはスペースいっぱいのお客さんが集まり熱気あふれる作品披露の場となった。

2日目のラウンドテーブルは、3部屋のグループに分かれて、それぞれに議論を上げた。A室『子どもの本屋の現場から』では、奥山恵氏(児童文学評論家/児童書専門店ハックルベリーブックス店主)、土井章史氏(絵本編集者/絵本の店トムズボックス経営)、三輪丈太郎氏(子どもの本専門店メルヘン・ハウス営業企画部長)よりそれぞれの個性的な専門店経営の状況をご報告いただき、子どもの本の流通や選書の工夫、子どもの本のこれからなどについてディスカッションを行った。このラウンドテーブルには毎日新聞社からの取材を受け、B室『絵本の読み聞かせ/紙芝居の実演』では、中平順子氏(子ども文化研究家/紙芝居グループ「紙ふうせん」代表)、武田美穂氏(絵本作家)より、実演、読み聞かせを



● オープニングトークのゲストによるサイン会



● 地下ラウンジでの交流会

披露していただき、参加者と共に体験することによってその特徴を考察した。体験を通して、絵本はそれ自体で完成した作品であるが、紙芝居は、作品・演じ手・観客が揃ったときに完成することが確認され、絵本と紙芝居の違いと独自性に気づく興味深い時間となった。C室『ブックデザイン・イラストレーションと絵本』では、渡邊良重氏(アートディレクター/デザイナー)、秋山花氏(イラストレーター)より、それぞれの作品制作歴について振り返りつつ絵本表現との関わりについて語っていただいた。株式会社KIGIのアートディレクターとしてグラフィック、テキスタイル、プロダクトデザイン、服飾デザインなど幅の広い活動を展開している渡邊氏、新進のイラストレーターとして活動している秋山氏は共に絵本作品を発表されており、「絵本」という表現の場が、イラストレーターにとってどのような可能性を拓くものであるかについて語りあう時間となり、一冊の絵本が完成するまでにどのように物語と絵が関係性を築いていくのか、その制作工程を丁寧に解説していただく貴重な機会となった。いずれのラウンドテーブルもたくさんの参加者に集まっていただき、熱気の冷めないままに無事に閉会式を迎えることとなった。

閉会式のあと、ラウンドテーブルの登壇者である武田美穂会員、渡邊良重氏、秋山花氏によるサイン会を行い、こちらも大会終了を名残惜しむかのような長い列ができて盛会であった。

この第18回絵本学会大会では、大会テーマに基づいて、多方面から「絵本」について語り合う場を提供することを心がけ、運営を進めたのであるが、会場に足を運んでくださった多くの参加者の方々が、それぞれに様々な入り口を持ち、様々な関わり合い方



● 大会会期中の併設展示「アニメーションとプリントメディア」



● 関連書籍の販売

が可能な「絵本」という表現文化の奥行きや深さ、おもしろさを改めてみつめ、その考察の原点に立ち返るような場は提供できたのではないと思う。

大会開催にあたっては、共催という形で東京工芸大学より会場使用料が無料で提供された。各日25名程度の学生スタッフが運営に携ったが、学生にとっても、大変貴重な教育の場となったことを教員の立場から深く感謝している。全員で力を合わせての運営であったことを、大会実行委員長として、この場を借りてみなさまに感謝の意を表したい。各発表者のみなさま、それぞれのプログラムのご登壇者のみなさま、そしてご来場いただいた参加者のみなさま、本当にありがとうございました。

(文責：第18回絵本学会大会実行委員長 陶山 恵)

※大会会期中の併設展示として「アニメーションとプリントメディア展」と題したアニメーション作家による絵本や挿絵本の展示も行われ、計200点余りの絵本・雑誌・書籍および映像作品が公開されて、「絵本」をめぐる世界の拡張性を体験することもできた。展示された物品はすべて東京工芸大学芸術学部アニメーション学科教員の研究資料である。

● 第18回絵本学会大会 「『絵本』という交差点」 開催データ
 会期：2015年5月30日(土)・31日(日)
 会場：東京工芸大学芸術学部中野キャンパス
 〒164-8676 東京都中野区本町2-9-5
 共催：東京工芸大学
 実行委員：
 陶山恵(委員長/東京工芸大学)、笹本純(理事/筑波大学)、内藤知美(会員/東京都市大学)、中川理恵子(会員/白百合女子大学他非常勤講師)、永田桂子(会員/京都女子大学大学院他非常勤講師)、小柳貴衛(東京工芸大学)、細川晋(東京工芸大学)、山中幸生(東京工芸大学)
 学生参加者所属大学(名簿記載順)：
 東京工芸大学、跡見女子大学、成安造形大学、フェリス学院大学、共立女子大学、東京都市大学、武蔵野美術大学、筑波大学、実践女子大学、白百合女子大学、相模女子大学、武蔵野大学、明星大学、星槎大学、梅花女子大学、大正大学、京都造形芸術大学、東京女子大学、東京芸術大学 計19校

※ 絵本学会ニュースでは今号と次号の2回に分けて第18回大会の報告を行います。「オープニングトーク」「基調講演」「ラウンドテーブル」は次号(No.56)に掲載します。

第 18 回 絵 本 学 会 大 会 報 告 研究発表

第1日目／A室
————— 2201 教室
座長：香曾我部秀幸

大会初日の研究発表A室は、3件の研究発表が行われ、座長は香曾我部秀幸が務めた。オープニングトーク、基調講演に先立つ今大会の最初のプログラムであったが、会場はほぼ満席の状態で、熱気のある研究発表となった。

発表者は、図書館員1名、大学教員1名、研究者1名という組み合わせで、発表のテーマは3件ともに絵本作品1冊あるいは作家1名に絞り込んで、その表現を独自の視点から深く読み解くといった共通の要素を含むものであったが、それぞれに研究の関心の領域や対象などは大いに異なっており、絵本研究の多様さを感じさせるものであった。とくに絵本研究にとって不可欠な「絵を読み解く」という行為の重要性が昨年度にも増して浮き彫りになったことが感じられた。

●
いわさきちひろのこども像
ー写真との関わりとその意味することー
坂本淳子（大正大学図書館員）

いわさきちひろの絵本作品については従来、日本画の伝統美にも通じる水彩表現の美しさ、確かな観察力とデッサン力に基づく人物表現の巧みさについて、その絵画表現の分析・研究が主として行われてきたが、本発表は、その子ども像のイメージの源泉を既成の写真との関わりから探ろうとする意欲的な試みであった。具体的には、1960年に発表された土門拳の写真集『筑豊のこどもたち』に掲載されたある少女の写真に焦点をあて、そこにちひろの絵のインスピレーション源としての少女像が認められ得ることを論じている。ただ、確かに子どものしぐさや表情の一瞬をとらえて、その個性や感情を描き分けるちひろの表現が、写真の特性に共通する要素があることは否定できないが、画家の表現を写真から直接インスピレーションを得たものとし、イメージソースを写真に求めることに関しては、より厳しい実証性と厳格な判断力が必要ではないだろうか。

〈発表要旨〉

いわさきちひろ（1918-1974）は、1940年代後半から1970年代前半まで、童画家、絵本画家・作家として、この時代を代表する活躍をしたアーティストの一人である。ちひろは1974年に55歳という若さで逝去したが、その後、ちひろ美術館（東京・安曇野）での展覧会で原画を展示し、評伝や画集や関連本の出版やグッズなどの販売を通じて、彼女の人生とその作品についての研究や理解が深まり、何よりそうした社会への普及力は目を見張るものがある。2012年には、彼女のドキュメンタリー映画が製作されたことで、雑誌の特集や単行本の出版が相次ぎ、ちひろとその作品は現在も多くの人々に愛され続けている。

ちひろといえば、「子ども」と「平和」を描いた画家として知られている。その子ども像の特徴は、喜び、憂い、不安、繊細な感性や健気さを持つ「子どもの心」を表現しており、子どもの瞳や

手の表情が豊かであると言及されてきた。このちひろの子ども像が、写真家土門拳が1960年に発表した写真集『筑豊のこどもたち』の主人公の少女「るみえちゃん」のイメージと通じ合う。土門の写真は、炭鉱の閉山に追い込まれた筑豊の人々の貧困を、社会の弱者の悲しみとその命の尊さをリアリズムの手法で捉えている。本書は、粗い紙質の小型で造本もシンプル、100円という定価で週刊誌のように大衆へ向けて制作され、10万部を越えるベストセラーとなり、映画化もされた。土門の社会における弱者の子どもの心理とその命の輝きをリアルに撮った写真が、ちひろの子ども像にインスピレーションを与えたとするならば、こうした弱者こそ幸せであるべきと考える、彼女の思いが読み取れる。従って、ちひろが童画や絵本で描いた子ども像は、戦前から続く、明るく元気な良い子をステレオタイプとした童画の枠を超えて、平和で命の尊重と個人の幸せや弱者（他者）への配慮を理想としてきた、戦後の社会とその文化や思想を表象していると指摘したい。

●
かがくいひろしの絵本に見る「生」の表現
ー『おしくら・まんじゅう』を中心にー
鈴木穂波（岡崎女子短期大学）

発表者は、ここ数年継続してかがくいひろしの作品の研究に取り組んでいるが、本年度の発表は、一昨年に引き続き、多くの作品で生命を持たない「モノ」を登場させるかがくいの特異性ー「擬人化」という概念では収まらない「生」への感覚ーに焦点を当てた興味深いものであった。とくに、作品に表わされた様々な要素ー構図・構成・技法・判型・詞の配置・詞の音感・キャラクターの動きと表情等々について、きわめて詳細な観察と分析に基づく研究が試みられている。物語の解釈論ではなく、絵本表現の特性を分析することによって作者の表現理念ー絵本観ーを追求しようとする本発表は、発表者独自の視点を感じられ、絵本研究の一つの方向を指し示すものとして評価できるものであった。

〈発表要旨〉

かがくいひろし（1955-2009）の作品では、人間が登場せず、日用品や食品などの「もの」が生命をもった姿で描かれるが、「もの」を人間の姿に置き換えた「擬人化」ではなく「もの」そのものが命をもつものとして描かれている。かがくいは、「身体感覚とか、生理的なこと、例えば食べることとか、生きている人の誰にでも共通する感覚を大事にしていきたい。」（註1）と語っているが、「もの」を通して私たちに共通する身近な感覚、中でも「生」に直結するものを読者が絵本と共有しあう喜びをもてるということが、かがくい作品の真骨頂といえる。

全15作のかがくい作品は、大きくファーストブックと創作物語絵本とに分けられる。『おしくら・まんじゅう』（ブロンズ新社、2009）は、ファーストブックのシンプルな構成をとりながらも、初期の創作物語絵本『おもちのきもち』（講談社、2005）、『もくもくやかん』（講談社、2007）などにみられる身体感覚や生理的感覚が色濃くみられるものである。この作品では、二つの「まんじゅう」が「泣かれる」、「はねる」、「くつつく」、「食べられる」そして、「おぼけになる」という各要素と展開に、それらの感覚が顕著に見いだされる。さらに、「おしくらまんじゅう おされ

て」というフレーズに合わせて、二つのまんじゅうの間に「もの」が入り密着するという繰り返しが、その身体感覚や生理的感覚というものを引き出していく。また、前述の創作物語絵本2作品と、ファーストブックにあたる『おふとんかけたら』（ブロンズ新社、2009）や「だるまさん」シリーズ（ブロンズ新社）などを総観することにより、かがくいひろしの「生」の表現というものの特徴が浮き彫りになる。

註1:「講談社絵本通信 新人賞インタビュー かがくいひろしさんの場合・後編」http://shop.kodansha.jp/bc/ehon/interview04.html

●
モーリス・センダックの『ケニーのまど』を見る
ー人生における危機一髪のと きー
正置友子（絵本学研究所主宰）

センダックは、『かいじゅうたちのいるところ』において、現実から空想世界への移行ー異世界での冒険譚ー現実への回帰というファンタジー絵本のスタイルを確立したことで高く評価されているが、本発表では、その原点ともいうべき自作絵本『ケニーのまど』に焦点を当て、ページ数の多さ、文の長さや連続性の欠如を指摘して、この作品がけっして質が高いとは言えないと冷静に評価を下している。ただ、単なる失敗作と片付けるのではなく、こどもの成長過程における精神的危機がこの作品のメインテーマとなっており、センダックの後年の作品に繋がっていく重要な役割を果たしていると論じたことは、ひとりの作家の作品の内容が徐々に進展し、理念が結実していく過程を私たちにあらためて認識させてくれた。

〈発表要旨〉

モーリス・センダックの作品を挙げるとなると、『かいじゅうたちのいるところ』です。センダックには、他の人の文章に絵をつけた絵本も多くありますが、『かいじゅうたちのいるところ』は、文も絵もセンダック自身が担当し、そのために完成度が非常に高い作品であり、1963年に出版されています。

今回取り上げる『ケニーのまど』は1956年に出版された作品で、センダックが文も絵も担当した最初の作品です。それまでも、ルース・クラウスの文章にセンダックが絵をつけた絵本が出ています。『あなほほものおこちるとこ』（1952年）、『うちがいっけんあったとさ』（1953年）、『シャーロットのしろいうま』（1955年）、『おふろばをそらいろにぬりたいな』（1956年）などです。

自作の絵本を作成したいと思っていたセンダックは、この時点で『ケニーのまど』を出します。この絵本は、線描の黒の他には、淡い色調のセピア一色であり、各見開きの文章も長く、ページ数は64ページから成り立っており、普通の絵本の倍のページ数があります。さらに、7つのエピソードから成り立っているため、1冊の絵本としての見開きの連続性に弱く、全体としてはドラマ性に欠けます。要するに、この時点でセンダックが表現したかったことをいろいろと盛り込み過ぎ、1冊の絵本作品としては、質が高いとは言えないものになってしまいました。ページ数の多さと文章の長さから見ると、絵本というよりは、物語的な作品と言えるかもしれません。文章の書き方は、かなり思索的であり、絵は挿絵的です。

それにもかかわらず、この作品には、絵本作品としての傑作と言われる『かいじゅうたちのいるところ』では、見事すぎるやりかたで解決される子どもの精神的危機が、ここでは非常に微妙に書かれていて、その陰影が心に残る1冊になっています。絵本作品としては失敗作かも知れない『ケニーのまど』を作成することで、センダックは名作『かいじゅうたちのいるところ』に辿り着くことができたのだと、私には思われます。

『ケニーのまど』では、ひとりの子どもが幼年期の終り頃から少年期を通過して行く過程で、出会うであろう精神的危機をテーマにしています。現代の子どもたちは、精神的危機を抱え込んで、一種の窒息状態にありますが、人生の初期の途上で通過したほうがいい「成長に伴う（自立に向かう）軋みや孤独」を回避させられていることにも要因があるのではないかと、この作品を読みながら考えています。

第1日目／B室
————— 2202 教室
座長：藤本朝巳

2202室では、「絵本」、「子ども」、そして「読み（読書）」をキーワードに研究発表が行われた。

永田氏は「児童絵本選択の視点」をテーマにし、大正時代の絵本に関する新聞記事などを参照し、乳幼児、児童向けの絵本の選択について発表された。永井氏・竹内氏は「小学校の集団読みと子どもたちの反応、受容」を話題にし、小学校での読み聞かせと現代絵本の受容について、調査をもとに、多様な解釈、創造的な読みが展開されたことを発表された。村松氏は「集団で読む場での談話分析」を話題にし、集団読みにおける現代絵本の受容過程を分析して、子どもたちの間で多義的な読みがなされる様相を発表された。

絵本研究は多様化し、さまざまな分野との交流も盛んになってきているが、「絵本」と「子ども」を関連づけて行う研究には、多くの方が関心を持っておられ、活発な質疑応答があり、有意義な発表の場であった。

●
児童絵本選択の視点のさらなる必要性について
ー先人の意見表明を参考にー

永田桂子（京都女子大学大学院非常勤講師）

〈発表要旨〉

今日、絵本の表現は驚くほど広がり、自由度を増していることは専門家たちの周知するところである。特に我が国では「絵本」という用語自体が曖昧な概念であるため、「絵本」は幅広い媒体で用いられている。こうした状況の中で、乳幼児・児童に向けて絵本を選択するにあたっては、どのような視点を持つかが重要だと考える。

児童の反応に頼って評価するのも一つであるが、一方で選択し手渡す側にも見識を持つことが大切ではないか。内容・表現・造本（特に3歳未満児対象）がポイントになると考えるが、内容やことばに関しては、個人の見解によってある程度の評価ができる。しかし、特に絵の技術面となるとなかなか評価はむずかしい。

さて、ここに竹久夢二の「子供雑誌の繪は如何に取扱はるべきか」

（読売新聞（朝）1923（大正12）年7月11日）という記事がある。「子供のためには、もつと線の太い、面の大きい、単色の繪（墨とかセピア一色刷りの）が、効果も多いし、所謂教育的であるはずだが、細いペンで描いた此の頃の繪は、どうも神経質で、金屬的で、騒がしくていけない。毛筆でもつとおほまかに朗らかなものを、ほしいとおもふのだが。」と述べ、池田永治と川上四郎の絵を「うまい」と評価している。当時は絵雑誌が氾濫（50誌ほど）した時代で、「コドモノクニ」が創刊された翌年にあたる。前後するが、同年には権田保之助（社会学者）の「コドモにはどんな繪本を興ふべきか」（『初等教育』七、九月號からの転載とあるが原資料不明・未見）という記事もある（『児童協會時報』4巻1号（日本児童協會1923（大正12）年1月）。『現代繪本の線』『現代繪本の色彩』『現代の繪本の繪と文字』『現代の繪本は内容が弱い』等の見出しを設けて厳しい意見を述べ、最後は「コドモにはどんな雜繪本（ママ）を興ふべきかの最も手近な解決は母親乃至父兄達がコドモ愛護の眞義に基き正しき選擇を爲すことである」と括っている。具体例をあげての見識ある視点のさらなる必要性を感じ、これらを参考意見としたい。

● 小学校の集団読みにおける現代絵本への反応

永井雅子（神奈川県中井町教育委員会英語講師）

竹内美紀（フェリス女学院大学非常勤講師）

〈発表要旨〉

本研究は、小学校という集団の中での絵本の読み聞かせを通して、子どもがどのように現代絵本を読むかについて調査した、絵本の受容研究である。調査は、集団による差異を考慮し、学校の種類（公立、私立）や地域（東京都心、ベッドタウン横浜、神奈川県郊外）の異なる3つの小学校の3年生、約250名を対象とした。先行研究をみた場合、リテラシー教育の先進国である英国やカナダでは、学校を巻き込んだ大規模かつ長期的な研究プロジェクトが実施されているが（Arizpe & Styles 2003, Styles & Noble 2009 など）、日本では小規模で限定された実証実験（Yohena・Takeuchi・Nagai 2007; 竹内 2011）に止どまっており、本研究は量的研究としても意義があると思われる。

調査方法は、1コマ40～45分の授業で、レベッカ・コップの最新作 Something（『なんだろう』2014）をクラス全体（30～40人）に対して読み、その後、グループ毎（6～12人）に自由に再読できる場を提供し、グループの話し合いの様子を映像及び音声で記録するとともに、研究者が用意した質問に対し文章と絵で



答えるワークシートに記入をさせた。調査後、学級担任などにフォローアップインタビューも行った。

実験に使用した絵本は、絵は細部を語っているものの文章は不十分で、結末はオープンエンドというように、現代絵本の特徴を備え、読者の創造的な読みを刺激すると考える。というのも、この受容研究が基盤としているウルフガング・イーザー（1982）の読書反応論が、テキストに織り込まれた「空白」や「不確定性」に注目するものだからである。

しかし、実際の読者を対象とした場合、ローゼン・ブラット（1978）らが指摘するように、読みの場という環境の及ぼす影響力は大きい。特に集団での読み聞かせの場合、読者同士の人間関係や、読者同士の相互行為が、各自の解釈に影響を与え、集団としての読みを生成していく。結果としては、子どもたちは、普段の国語の授業で求められる「一つの正解を導くための枠組み」に影響を受けて正解のない問いに戸惑いつつも、多様な解釈を展開し、創造的な読みを実証してくれた。

なお、本発表は絵本学会より研究助成を得た共同研究「集団での絵本の読み聞かせの視点からの子どもの読みの検証」（構成員は永井雅子、竹内美紀、村松麻里）の成果の一部である。

● 現代絵本を集団で読む子どもたちの語りと解釈 ― 談話分析の視点から

村松麻里（共立女子大学非常勤講師）

〈発表要旨〉

本発表は、東京及び神奈川の3つの小学校で行った現代絵本の読み聞かせ調査における子どもたちの話し合いの記録とワークシートをデータとして、子どもたち同士のコミュニケーションと物語解釈の生成との関わりを分析し、集団における物語受容の様相に光をあてようとするものである。

調査では、小学3年生の児童を対象とした40-45分の授業のなかで、語り手である大人がクラス全体への読み聞かせを行った後、6-12名のグループに分かれた子どもたちが自由に絵本を手にとって読み返したり任意の箇所を確認したりしながら自由に話し合い、ワークシートとして与えられた問いかけに対して絵と文章で応答した。題材とした絵本はレベッカ・コップによる Something（『なんだろう』2014）という作品であり、主人公が自宅の庭で発見した「穴」の奥（地中）に住む「何か」の正体をめぐって、作中の登場人物たちも読者も「なんだろう？」と考え、あれこれと想像をめぐらせずにはいられない物語である。調査では、子どもたちの読みを誘導するような「読書指導」としての大人の介入を基本的に行わず、子どもたち自らが自由に話し合えるようにした。また、作品自体も絵と文とがそれぞれに物語り、多義的な解釈が可能な現代絵本であるため、子どもたちの読みに、成績評価の対象となるような教育的な「正解」が求められているわけではない。

本発表では、こうした場での子どもたちのコミュニケーションの様相を、彼らの発話に焦点化して言語学の談話分析の手法を用いて記述し紹介するとともに、子どもたちの記したワークシートと併せて分析し、集団読みにおける現代絵本の受容過程について考察する。

なお、本発表は絵本学会より研究助成を得た共同研究「集団での絵本の読み聞かせの視点からの子どもの読みの検証」（構成員は永井雅子、竹内美紀、村松麻里）の成果の一部である。

第2日目／A室 ―――― 2201 教室

座長：生田美秋 今田由香

大会2日目の研究発表ⅡのA室は、4件の研究発表が行われ、座長を生田美秋と今田由香が務めた。

発表は、絵本史をテーマとしたものが1名、絵本と教育をテーマとしたものが2名、絵本の表現をテーマとしたものが1名だった。発表者は美術教育の研究者、元美術教育雑誌の編集者、作家・翻訳家、絵本・ブックアートの研究者と専門ジャンルの多彩な研究発表となった。専門・研究ジャンルの多彩さは、あらためて絵本への多様なアプローチの可能性を示していた。絵本という表現メディアの特徴の一つはすず野の広さにあり、今回のような多彩な発表の積み重ねにより、絵本と絵本研究がより豊かになっていく。研究発表は時間の制約もあり、研究成果を十分に伝えることはむずかしい。会場からの発言を踏まえて再度の見直しを行い、紀要などへの発表を期待したい。

● 「漫画家の絵本の会」～25年の軌跡について

森高光広（植草学園大学発達教育学部教授）

発表者は幼稚園、小学校の図画工作科から中学校の美術科まで、各発達段階に応じて子どもが意欲的に造形活動に取り組みための効果的な指導法を主に研究している。発表はやなせたかし、馬場のぼらの「漫画家の絵本の会」の25年の軌跡をたどり、(1) 絵本の世界や絵本作家、会に所属する漫画家に及ぼした影響、(2) 絵本読者に何をもたらしたか、(3) 作家本人にとってどのような意味のある活動であったのかの3点から会の絵本界での存在意義、絵本史における位置づけを試みるものであった。例えば、多田ひろしがインタビューのなかで、漫画家の長新太の影響で絵本を書き始めたこと、『おんなじおんなじ』は言ってみれば4コマ漫画の延長なのだと言するなど、会に所属する作家たちが個々に会の活動や意義を述べたものはあったが、会を全体として扱ったものはなく、意義深い発表であった。上記の歴史的な位置づけを中心とした視点のほかに、やなせたかし、馬場のぼる、長新太、多田ひろしなどは漫画家でありながら絵本作品もロングセラーとして読み継がれている作品も多く、作品ごとに絵本とマンガの表現の共通点と異なる点を丁寧に分析することにより、絵本表現や子ども感の違いが浮き彫りになるのではないかという期待を持った。

〈発表要旨〉

「漫画家の絵本の会」は、丸善日本橋本店画廊において、1972年（昭和47年）より漫画集団所属で絵本に関わりのある漫画家たちが集まり、毎年展覧会を開いたことから始まる。

書店の催しではあるが、25年間続けられ、参加した漫画家の多才ぶりからもその影響は少なくないと考ええる。やなせたかし、手塚治虫、馬場のぼる、長新太、おおば比呂司、前川かずお、東君平、永島慎二、多田ヒロシ等、名のある漫画家が多数参加している。会の25年間で入れ替わりもあったが、参加した漫画家は多士済々で、

それぞれが多面で活躍し、単に絵本界にとどまらず一般的な認知も高かった。展覧会は東京本店をはじめとして全国各地の丸善支店ばかりでなく、地方のデパートなどでも催され、例年多くの人が訪れた。漫画家たちは毎年多忙なか中、絵本の原画の出品を続け、「漫画家の絵本の会」として出版された本もある。参加した漫画家の物故が続いて自然消滅した形ともなっていたが、1999年(平成11年)に漫画協会(当時会長:やなせたかし)によって25周年記念パーティを迎えるまで「漫画家の絵本の会」の活動は続けられていた。現在、会として出版された書籍の多くは絶版となり、会の詳細も曖昧となりつつある。「漫画家の絵本の会」に参加した漫画家たちの多彩な活躍をみても、社会的な影響や絵本界における影響は決して少なくない考える。会の25年間は、出版界や絵本界も多様化し、絵本における表現も新たな展開や発展が現れた時代とも重なる。当時の社会情勢や絵本界の状況も踏まえて、「漫画家の絵本の会」の活動やその存在について改めて振り返る。会に参加した漫画家たちが、いかに絵本の世界で自分の表現を試みようとしたか、その足跡を踏まえて、絵本界における「漫画家の絵本の会」の存在意義についてまとめる。

● 絵本作家に見る美術教育観 ― 美術教育雑誌「美育文化」のインタビューから

穴澤秀隆（NPO 法人市民の芸術活動推進委員会理事）

発表者は美術教育の専門誌「美育文化」の編集長として長く「美術と教育」を中心に活躍したジャーナリストである。発表は編集長として担当した「巻頭インタビュー」のうち、やなせたかし、林明子、五味太郎、長新太、いわむらかずお、馬場のぼる、田島征三、三浦太郎の8氏のインタビューから絵本作家にみる「美術教育」のあり方を問うものであった。特に林明子、長新太が学校の美術教育に対して好意的であるのに対し、五味太郎、田島征三は違和感を表明しており、この違いをどうとらえるかが発表の中心であった。「絵本作家と美術教育」という興味深いテーマを設定して問題提起を行った点は評価できるが、インタビューからわかることには限りがあり、インタビューを契機としてさらに掘り下げた検証、分析が求められる。

〈発表要旨〉

1. 発表の動機と背景

「美育文化」は、1950年の創刊以来、図工・美術教育の紹介、研究を行ってきた美術教育の専門誌であったが、通巻64巻の2014年3月号をもって休刊となった。

発表者は、1981年より2014年までの33年間、同誌の編集に携わり、93年以降は編集長を勤めた。

この間、巻頭インタビューとして、149回に渡り、各界の著名人に、美術教育の体験や美術教育観に関する取材を行ったが、その中で絵本作家へのインタビューは重要な位置を占めている。

2. 発表の内容と方法

149回のうち、絵本作家への取材は、やなせたかし(1993年)、林明子(1994年)、五味太郎(1996年)、長新太(1996年)、いわむらかずお(1997年)、馬場のぼる(1999年)、田島征三(2001年)、三浦太郎(2013年)の8回である。

3. 発表の概要と展開

このうち、林明子は「図工の時間の教室は歓声に溢れていて楽しかった」と述べており、長新太は、「美術の先生は、服装からして自由な雰囲気があった」など、概ね肯定的な意見を述べているのに対して、五味太郎は、「美術教育は100年をかけて美術をだめにしてきた」、「強制的に描かされる美術などあり得ない」と、辛辣とも言える批判を行っており、田島征三も「教室から見た風景をイヤイヤ描いたこともあった」と美術教育への違和感を回想している。これは、それぞれの作家の美術教育体験の相違によるものとも思えるが、作家の資質が反映されており興味深い。

4. 展望と主張

美術教育の目的は、美術という文化遺産の伝達では必ずしもなく、美術という方法による人間教育、すなわち、Education through Art であると言われている。この理念に、日本の代表的な絵本作家がいかなる距離感を持って接してきたかを検証することにより、それぞれの美術観、教育観を明らかにしたい。

● 教育者としてのモーリス・センダック

～大学とフェローシップにおける若手作家支援～

中村泰子（作家・翻訳者）

発表者は多彩な活躍で期待を集める若い作家、翻訳家である。発表はモーリス・センダックの教育者としての側面について、大学での授業とフェローシップ活動をとおして光を当てるものであった。センダックは、「百余年にわたる絵本の歴史のなかで最高の作家だと断言してはばからない」(J・R・タウンゼント)と言われ、その作家論、作品論も数多く発表されているが、教育者としての面にスポットを当てた研究は少なくとも日本では初めてではないだろうか。本研究はセンダック論にとどまらず、絵本表現の特徴、絵本の創作方法、絵本創作者の教育、創作者の子ども像・子どもの深層理解などについても貢献することが期待される。さらに調査を行い、研究成果を学会紀要に発表していただきたい。

〈発表要旨〉

60年に及ぶ作家生活の中で80冊以上の絵本を生み出し、絵本の世界に新たな地平を切り開いたモーリス・センダック。センダックには、大学での絵本講座や自身が設立した若手作家対象のフェローシップにおいて、作家の卵たちを熱心に指導した教育者としての一面がある。本発表では、以下2点の事例から、センダックの教育者としての功績を紹介する。

(1) 大学教育におけるセンダック

2013年にNYで開催された回顧展の図録『Maurice Sendak: A Celebration of the Artist and His Work(モーリス・センダック～作家とその作品～(未訳訳)』)のうち、Paul O. Zelinsky による「Maurice Sendak as Teacher, Educator, and Mentor (教師、教育者、指導者としてのモーリス・センダック)」を取り上げる。コールデコット賞受賞作家であるZelinskyは、エール大学でセンダックの絵本の授業を受講したことで、絵本の創作を自身のキャリアに定め、卒業後もセンダックとの交友を保って助言を得ていた。Zelinskyによる回顧を通して、センダックがいかに学生を指導していたか、その姿を探る。

(2) フェローシップにおけるセンダック

2010年、センダックは、有力な若手を選出して自身のスタジオに招待し、各自のプロジェクトに取り組みながら作家や編集者たちと交流できる1か月間の滞在型プログラムを立ち上げる。The Sendak Fellowship と名付けられたこのレジデンス・プログラムは、作家の没後も継続され、毎年2名が選出されている。2014年度を受賞作家の1人でParsons New School for Designの教員であるNora Krugへのインタビューを中心に、このプログラムの意義を紹介する。

発表の最後に、大学における絵本教育の今後の可能性について、特にイラストレーションとデザイン教育の観点から、発表者が昨年まで所属した京都造形芸術大学の事例を通じて考えたい。

● スタシス・エイドリゲーヴィチュスの作品にみるアート表現と絵本表現の交わる時

中川素子（文教大学名誉教授）

発表者は絵本やブックアートなどを専門とし、特にアート表現の面から絵本を研究し数々の著書、論文を発表している。2015年刊行の絵本『アウスラさんのみつあみ道』(石風社)の文を発表者が担当、絵はスタシス・エイドリゲーヴィチュスが描いている。発表はスタシスなどアート表現と絵本創作を並行して行っているアーティストを取り上げ、両方に共通する表現から、絵本を考える視点を導き出そうとするものであった。最初にアート表現と絵本の創作を並行して行っている元永定正、新宮晋、ヤノベケンジなどの活動の紹介があり、続いて、本題であるスタシスに言及した。スタシスは現代ポーランドを代表するアーティストの一人で、その特異な才能にあふれた絵本やアート作品の数々は国際的な賞の受賞歴と根強いファンを持つ作家として知られている。『アウスラさんのみつあみ道』で物語を書いた発表者は、リトアニアに古くから伝わる物語を下地にこわれた世界をみつあみで蘇生させる普遍的な祈りの物語として再生させている。発表者の脳裏には震災などの自然災害から立ち直ろうとする現在の日本人の再生の物語としたいという希求が込められていただろう。作品の分析は、「書き込むべきところの省略すべきところ」「象徴的な表現」「幻想的な表現」などのキーワードが示されたところで時間切れとなった。紀要などでの研究発表に期待したい。

〈発表要旨〉

絵本以外のアート表現に主に携わっているが、絵本も出しているアーティストは多い。作品に第三者が詩をつけて絵本化した例、創作の様子を絵本にした例などもあるが、元永定正、新宮晋、ヤノベケンジなど、アート作品と絵本が同じテーマを追い求め、共鳴させているアーティストもいる。絵本を理解するためには、立体やインスタレーションなど別分野であっても、見ていく必要がある。

そういったアーティストの1人として、1981・89年プラチスラバ国際絵本原画展で受賞、1986年バルセロナ国際絵本原画展グランプリ、1990年ベオグラード国際絵本原画展グランプリ、1991年プラチスラバ国際絵本原画展グランプリ、また1994年富山ポスタートリエンナーレ金賞など世界的に活躍しているスタシス・エイドリゲーヴィチュスをとりあげる。

スタシスの生地リトアニアは、第二次世界大戦中にソビエト連邦やナチス・ドイツに侵攻され、その体制下による生活は暗いものであったが、移住地ポーランドも1981年には戒厳令がしかれ、スタシスは長い間、不自由な生活をしいられた。

そういった影響のためか、スタシスにはマスクをしたり、編み込まれたりやや拘束感が感じられる作品が多いが、それらは政治的社会的言語意味で語られることなく、記憶や身体感覚による人間と物の結びつき、また時空間の不思議な広がりなどにより表現されている。

スタシスは、蔵書票、ブック・アート、絵画、ポスター、仮面、彫刻、インスタレーション、パフォーマンス、映画など多様な表現をしているが、それらと絵本『ながいおはなのハンス』(ジェームス・クリュス文/スタシス・エイドリゲビシウス絵/あまめまはるき訳/ほるぶ出版/1991)や『アウスラさんのみつあみ道』(なかがわもとこ文/スタシス・エイドリゲーヴィチュス絵/石風社/2015)などに共通する表現例をみつけだし、絵本を考える視点としたい。

第2日目／B室 2202 教室 座長：石井光恵

研究発表ⅡBでは、絵本を使った実践的な研究の発表が特徴的なセッションとなった。小学校の教育現場で、英語教育、国語教育での絵本の使用効果や教材化の有効性について考えたり、図書館のボランティア活動での絵本の読み聞かせなど、実践的な取り組みを日々行っている方々の熱い発表が続いた。第1発表者の金澤延美氏の発表は、「小学校英語」の教材化に取り組んでいる経験を生かし、アンドレ・ダーハンの文字なし絵本『MEIN FREUND DER MOND』で、子どもたちの作話課題(日本語による)に挑戦した報告であった。主に子どもたちが使用した「語」からの数量的な解析をもとに、傾向が語られた。文字なし絵本は、子どもたちが楽しみながら課題に取り組める「表出環境」であるという結論が印象的であった。第2発表者の松本由美氏は、小学校英語教育に携わる中で使用してきた絵本たちについて、絵本の「文」を文体や物語の観点から分析し発表を行った。英語教育教材に取り上げる絵本の質への着目の重要性を思った。第3発表者の藤井スミ苑氏の発表では、1997年(絵本学会創設)に絵本学会に入会以来記し続けてきた、絵本の記録ノート作り(12冊のノートに1300冊の絵本からの記録)が紹介された。ユニークなのは、絵本の絵を模写して記録する方法で、そのことによって絵本をよく観察することになり、絵本に潜む多くの情報に気づけたとのことであった。



研究の不断の積み重ねが絵本の本質を探り当てる、絵本研究の原点に帰る実践報告であった。

文字なし絵本を使用した作話課題からの一考察 —4年生対象の実践データ分析から—

金澤延美（駒沢女子短期大学教員）

〈発表要旨〉

平成23年4月から実施となった小学校の学習指導要領は、平成20年(2008年)3月に改訂された。同年の学校教育法の「小学校教育の目標」の中に「課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力」を育てることが明記された。

筆者は「小学校英語」の教材開発に取り組む中で「文字なし絵本」に着目し、「文字なし絵本」の外国語活動および国語教育の教材化についての研究に着手した。本研究では、小学校4年生27名にアンドレ・ダーハン作の文字なし絵本MEIN FREUND DER MONDに日本語でストーリーを書かせるという作話課題を出し、記述力および表現力を探る調査を実施した。

研究課題は、①記述内容の全体的な傾向 ②絵本の各ページにおける場面表現の有無 ③表現するための使用品詞、の3点である。これを明らかにするため、記述内容を自由記述などのテキストデータを計量的に分析するソフトウェアKH Coderを用いて分析した。記述内容の延べ語数は1840語、異なり語数は516語であった。①については、記述内容に含まれる語彙の頻度、品詞ごとの語彙の頻度を明らかにし、登場人物(擬人化された物を含む)、登場人物の回りに描かれている物に関する語彙の出現回数が多く、子どもたちが各ページの絵をよく見て文章を書いたと思われることが分かった。②については、語彙の共起ネットワークを作成し絵本の各ページの内容の出現を観察した結果、各場面を十分に反映したネットワークが形成されておらず、各ページに描かれていることを利用しながら関連付けた記述がされていないと推測される。③については、動詞が最も多く、オノマトペが多いことが分かった。修飾語の使用度は低く、このことは詳細な内容、表現の豊かさ等への影響があると思われる。今回の調査後、ほぼ全員の子どもたちから「楽しかった」「またやりたい」という肯定的な回答を得ることができた。楽しみながら課題に取り組める「表出環境」の設定に、文字なし絵本は利用価値が高いと思われる。発表時には本調査結果の詳細を報告するとともに、思考力、表現力を伸ばすために文字なし絵本を授業に活かす方法も提案する。

● 絵本の英語教育への応用の可能性

松本由美（玉川大学リベラルアーツ学部）

〈発表要旨〉

英語絵本の読み聞かせは、古くから教育に取り入れられているが、それは教育に携わる大人たちが、個人的に絵本の持つ力に魅せられ、それを子どもに伝えるべく教育現場にも取り入れてきたように思われる。近年、教育学的見地から外国語インプットの一手法としての絵本の優越性が徐々に明らかにされつつあるものの、絵本画家による芸術性の高い絵と、作家の手により選りすぐられたことばの総合芸術ともいうべき絵本が、単に英語に触れる、単語

を覚えるなどという実践的な教育目的のためだけに読まれるのは大変にもったいないことである。絵本の持つ力を十分に伝えることができれば、子どもの豊かな感性を育み、異文化理解、さらには人間理解にもつながる本質的な総合教育が可能になると考える。

そこで、本発表では小学校英語教育に携わる中で発表者が取り上げてきた絵本について、絵本学の立場からも分析し両者の融合を試みたい。まず絵本の「文」については、英語教育学の観点だけではなく文体論や物語論の立場から分析し、英語特有の文体とリズムやテーマについてより深い解釈を提示したい。絵本の「絵」の読み取りについては、藤本朝巳氏の「絵本はいかに描かれるか」「絵本のしくみを考える」の解釈を紹介しながら、英語教育に応用できる可能性を探りたい。また、絵本独特の表現形態である、見開き、ページ送りの緩急についても様々な立場からその効果を考察しておきたい。

取り上げる予定の作品は、英語教育界ではバイブルとも言えるエリック・カール、ディック・ブルーナはもちろんのこと、英語教育の現場ではほとんど取り上げられることのなかったものの絵本としては名高い作品を取り上げ、中学、高校の英語教育における絵本の活用も考えていきたい。

● 私だけの絵本研究ノートから生まれた豊かな時間 ―だれでも最初はまねっこから―

藤井スミ苑（ひこね児童図書研究グループ）

〈発表要旨〉
図書館のボランティアグループの会員になり、今年で32年目を迎える。近年、各地で読み聞かせ活動も活発になり、子どもたちに絵本を使った「おはなし会」や学校からの要請によるブックトークによって、より多くの絵本の情報が求められている。

1997年に創設された「絵本学会」に入会した時、学習のために絵本の感想をノートに記録し始めた。しかし学習した絵本の感想を記録していくだけでは人前で語るのに絵本の記憶が薄れている。より効果的に記憶する方法はないだろうか。そこで考えたのが、絵本の中のどの絵が印象深く残るか、その部分を模写して感想を記録することにした。そのことによって、記憶に残るとともに学習の楽しさを実感することができた。記録大学ノートは12冊目（絵本にして1300冊強）になり、自前の情報源としてなくてはならない学習ノートとなっている。

本発表では、模写することによって、絵本作家・画家の工夫を知り、絵本の魅力を深く理解することができた、それらの具体例を示しながら発表します。

・模写することが楽しくて、絵本の学習に喜びを感じ、さらに多くの絵本を見る機会に恵まれ、継続は力なりに繋がっていった。

・おはなしの会で読む選書やブックトークのプログラム作りに役立つ、熟意をもって子どもたちに伝える「話す力」が身についた。

・子どもだけでなく大人にも絵本に対し共感を得て広がる場をもてた。

・ノートを活用し、分類に繋がる「手作り絵本」を作成することができた。

絵本を模写することは古典的な学習法だが、絵など描いたことの

なかった自身に力を与え、絵本を介して仲間との交流の場を与えてくれたことはもとより、絵本に関心がなかった人々にも絵本の良さを知ってもらえた。

第2日目／C室
2203 教室
座長：永田桂子
大会2日目の研究発表C室では、3件の研究発表が行われ、座長は永田桂子が務めた。

発表者は、1名が本学会初参加で「妖怪絵本」をテーマにした発表、2名が同一テーマで年度を重ねている継続発表であった。いずれも他に類のないテーマとして参加者から興味をもたれたようだが、議論の糸口がなかなか見いだせないで終わったように思う。研究の積み重ねとともに、それぞれの研究の論点の絞り込みを期待したい。

妖怪絵本の歴史と現状

―子どもたちに伝えたい自然観と関わって

富田克巳（日本福祉大学助教）

発表者自身が「お化けの世界は多くの子どもたちの中に興味の対象として入り込んでおり、お化けと絵本とは切り離せない関係にある」と指摘するように、特に現在、妖怪絵本の流行には目を見はるものがある。草双紙の時代からの推移をざっと報告されたのだが、短い発表時間ではやはり限界がある。各時代の教育理論や社会状況なども絡ませて、継続発表をされるとよい。

〈発表要旨〉

保育園の1歳児クラスから、追いかけられたり隠れたりといった遊びが楽しめるようになってくる。そこに「オバケ」など想像上のイメージの世界を重ねることによって、さらにワクワク感ドキドキ感が高まっていくことになる。こういった遊びはおそらく家庭でも行われているのではないだろうか。1歳半を過ぎるころからイメージの世界が持てるようになり、見えない「扉」の向こうが気になりだし、それが探索の意欲にも繋がっていく。そのような子どもの心をくすぐるかのように大人は、子どもとの生活や遊びの中で、「あれなんだろう?」「変な音がしたよね」「おばけかも?」といった会話を一緒に楽しむ。子どもたちはおばけの世界が、怖いけれど、いや怖いからこそ、大好きなのである。しかし、一線を超すと怖くて泣けてしまい、精神的なダメージを受けることにもなる。

お化けの世界は多くの子どもたちの中に興味の対象として入り込んでおり、お化けと絵本とは切り離せない関係にあるといえる。しかし、草双紙の時代から子どもたちに愛されてきたお化けではあるが、大正以降の絵本の世界ではなかなか受け入れられないでいたようだ。70年以降になってようやく、クリクリ頭の白い布を被ったような足のない「おばけ」なるものが日本の絵本の世界に登場するようになる。このタイプの可愛い「おばけ」は根付いていったが、草双紙に出てくるような妖怪の登場は、瀬名恵子のおばけえほんシリーズ（74年～）、川端誠の妖怪絵本（84年～）と続くが、絵本界全体にはそれ程広がりを見せてはいなかった。ところが、妖怪ウォッチ流行以前の2011年に『妖怪横丁』『ようかいガマとのおイケにカエる』、怪談えほんシリーズ『悪い本』『マイマイとナイナイ』が発刊されると、妖怪絵本の出版の勢いは止まらなくなり、現在に至って

いる。この状況から、妖怪を許せる絵本界・教育界の意識の変化と子ども（人間）と自然との関わりへの絵本表現者、編集者からの思いが感じられる。

● むりえの特性 ― 戦前のもりえ作品を中心に―

浜崎由紀（京都光華女子大学非常勤講師）

「もりえ」をテーマに2014年から発表されている。戦前（1926年～1945年）に出版された30点（16点は教育現場で使用されたと思われるもの、14点は市販のもの）が画像と印刷配布資料とで紹介された。塗られる前のきれいな形で残ることの少ない貴重な作品群であり、画家には著名な童画家の名が記されたものも見られて、参加者の関心を集めた。絵本との重なりも大いにあるジャンルとして研究を深められたい。

〈発表要旨〉

1. はじめに

もりえは子どもを対象とした児童文化財や保育教材であり、現在では大人のもりえとしても出版されている。もりえ絵本、立体もりえ等も登場し、時代やその用途に応じて様々な形態で出版されている。それは、もりえの持つ特性が影響していると思われる。本発表では、以下の項目でもりえを分析し、その特性を明かにしたい。今回は戦前のもりえを取り上げる。

2. 作品分析と結果

以下の項目で分析した。

(1) 図柄

(2) 輪郭線

(3) 内容（テーマ）

(4) むり方の見本の有無

(1)は①「モノ」や「コト」を表す具体的な図柄②「モノ」の一部を省略し、想像させる図柄③幾何学模様の図柄に分類された。①は「モノ」や「コト」の認識を子どもに促し、「モノ」や「コト」への興味を抱かせる。②は省略されている部分、例えば、イヌの胴体だけが描かれているので、イヌの頭を想像して描く想像力が求められる。③は色は固定されず、自由な配色で彩色する独創性が求められる。これらの図柄を彩色することにより、輪郭だけであった未完成な作品が完成し、彩色した本人の作品になるという特性を持つ。

(2)は①細い線②太い線③毛筆線に分類された。①は筋肉を動かすことを練習し、注意深く彩色し、集中力が養われる。②は、はみ出しが分かりにくく、完成したという達成感、満足感を味わうことができる。③は完成した際に鑑賞の対象として見ることができる。

(3)は①一枚ずつ独立した図柄で、一貫したテーマがみられないもの②図柄の名前と事柄の説明が文で書かれており、絵話として成立するもの③「おはなし」になっているものに分類された。②③は、もりえの持つドラマ性からその思想性を発信するメディアとなり、ドラマの間接体験ができる特性を持つ。

(4)は、むり方の見本が①有②無に分類された。①は見て真似て彩色し、配色を知る。②は自由に彩色することができ、独自性が求められる。

3. おわりに

もりえは、以上のような特性を持つ文化財である。彩色するとい

う行為によって完成され、自分の作品として大事にする気持ちを育てるという特性も持っていることが明らかとなった。

● 米国教育使節団からの「本の贈り物」(Gift of Books)のなかの絵本 IV ― 日本語訳されてない絵本2 ― 細川七重（絵本学研究所研究員）

2012年から継続して4回目の発表である。「日本語訳されていない絵本」については3回目にあたる。今回は2冊を取り上げての考察であった。贈られた児童書は第1便が538冊、第2便が195冊であるという。そのなかから該当する絵本を探し出して、一冊一冊に考察を加えていかれるようだが、今一度その目的を確認されると研究が進めやすく、作業も効率化するのではないか。

〈発表要旨〉

第二次世界大戦後の日本に、GHQ（連合国軍最高司令官総司令部 General Headquarters）は、日本の民主化をすすめるための一環として、最高司令官マッカーサー元師の要請により、「米国教育使節団」(The United States Education to Japan: USEMJ)の27名が1946（昭和21）年3月5・6日、来日した。

使節団の一行は、日本の施設や学校を視察した折、公共図書館などに児童書の所蔵が少ないことに強い印象を受け「日本の民主主義に対する使節団の関心の象徴として」日本の子どものために、アメリカから多数の児童書（絵本を含む）と教師のための本を「本の贈り物」として寄贈する決議をした。「本の贈り物」の第1便は、アメリカから1946年11月頃、児童書は538冊が発送された。

その児童書の中には、『ちいさいおうち』『100まんびきのねこ』『かもさんおとおり』『ちびくろさんぼ』『アンディとらいおん』『はなのすきなうし』『もりのなか』『ピーターラビットのおはなし』『げんきなマドレーヌ』『百まいのドレス』など、その後、日本語訳されて現在も読み継がれている絵本がたくさん含まれていた。

しかし、反面、日本語訳されていない絵本も多数あり2013年、2014年の絵本学会大会研究発表において「米国教育使節団からの『本の贈り物』(Gift of Books)」のなかの日本語訳されていない絵本を取り上げ発表した。

本発表は、一昨年、昨年に引き続き日本語訳されてない絵本の中から下記2冊を取り上げ考察する。

・「民話と空想的おはなし」Folk and fanciful Tales ―Traditional and Modern (51～94)から

84番の M.M. P etersham *The Rooster Grows*

Macmillan 1945 4～8 yrs.

・「宗教」Religion (95～104)から

99番の J.O. Jones *Small Rain* Viking 1943 Gr.1～4

【参考文献】

・今まど子 1996 「アメリカ教育使節団の贈り物」『中央大学文学部社会科学科紀要』No.6

・中村百合子・三浦太郎 2001 占領期における教育使節団からの「本の贈り物」日本図書館文化史研究会編 『図書館文化史研究（年刊）第18号』日外アソシエーツ

・中西美季 2006 教育使節団から贈られた「本の贈り物」児童書リスト 戦後60+1周年子どもの本・文化プロジェクト第7回セミナー資料

本年度の作品発表も例年に倣って実施した。全10件の発表について、原画（写し）および本の形の絵本作品を一会場に並べて展示し、2日間の大会期間中は自由に見学できる様にした。2日目の午後には、発表者によるプレゼンテーションを行った。来聴者を前に、各発表者が作品の傍らに立ち、順次、制作意図や見どころ等を説明し、それに対する質疑応答が行われた。各発表時間は10分に満たない程度であったが、全発表終了後に、来場者・発表者間の個別のやり取りが出来るフリートークの時間が設けられた。

発表者の内訳は、毎回発表をなさるベテランの方から初めての方、年齢やお立場も様々で、多彩であった。各作品も、表現内容がそれぞれであるばかりでなく、制作の意図・目的や方法、本の形状・サイズ等々、多種多様であり、絵本という枠の幅広さを感じさせた。諸事情により会場が少し手狭であり、特にプレゼン発表時には、多くの参加者を迎え非常に混雑したが、皆さんの協力により、活気溢れる雰囲気の中で、次第は無事に進行した。質疑応答も活発で、充実した作品発表となった。

作品発表は本学会の核の1つであり、さらなる充実発展を願う。
(座長：笹本純)

〈発表要旨〉

「ワークショップから生まれた手作り絵本」

加賀美裕子・土屋侑美・染谷照代・小作恵子
(東京展「絵本の部屋」)

2011年4月23日に絵本学会の企画で、一日で絵本を仕上げることを目標としたワークショップを開催しました。講師の土屋侑美は、会場と時間の制約から、オリジナル色紙によるコラージュと簡易アルバム製本の絵本作りを考案しました。それ以降、東京展「絵本の部屋」のメンバーを中心に同様なワークショップを積み重ねてきました。その成果の一つが大垣市スイトピアセンターに於ける親子対象の年一回で三年に渡り行われたものです。作品はセンター内のアートギャラリーで一般に展示され、好評を得ています。オリジナル色紙によるコラージュ絵本を通じて、絵本を手作りする喜びを年齢や性別に関係なく伝えられる運動を続けていきたいと考えています。



「ばけばけこうさてん」 からさきまい（イラストレーター・講師） あわやまり（詩人・ひらく堂）

「交差点」をテーマに、年少期向けの作品を制作しました。人は出会ったものに刺激され、影響され変化していきます。この作品では「ばけばけこうさてん」でぶつかり、変化するものを、おもしろおかしく描きました。

「ストライクんとしまみちゃん」

佐藤みづき（岡山県立大学大学院デザイン学研究科）

私は現在、大学院修士課程にて縞模様の研究をしている。その過程で、絵本において縞模様を活かすことが出来ないかと考えた。本作品では、絵本に縞模様の歴史の流れを取り入れながらも、視覚的にも縞模様を楽しむことができる絵本の制作を試みた。また、日本と西洋の縞のルーツや意味の違いにも焦点を当てる。実は奥の深い模様である縞に、この絵本を通じ気軽に触れ合ってもらいたい。

「チューリップがさいた ～命・希望～」

實吉明子（湘北短期大学保育学科教員）

チューリップを通して、時間の経過と色の移ろいの中にある希望を表現する。チューリップの花が咲いたのを見つけた時の喜びと、花が咲ききって花弁が散る姿を見る時の感情には落差がある。しかし、球根の姿で越冬し再び春に開花するその生命力に気付くと、花弁が散った先にも希望が見えてくる。球根、芽、葉、つぼみ、開花、散る、しおれる、球根…。その変化の中で、春を待ち、春をもたらす花。その姿に見出す「命・希望」。

「White Nights」

手良村昭子（滋賀短期大学准教授）

主人公の白い小鳥ラウラは小鳥なのに歌が歌えません。ある日、森の奥に住むギタリストの青いうさぎラッカスとの出会いで歌うことの楽しさを知ります。そして、ラッカスはラウラと歌の練習をすることで本当の音楽を見つけて行きます。今回の作品は物語と絵、音楽を合わせた「音楽×絵本」作品として制作しました。当日は音楽と共に発表させていただきます。



「おかあさんには ないしょ」

中村泰子（作家・翻訳者）

「おかあさん、みてみて」なんでもすぐにお母さんに見せたがる女の子。お母さんはいつも、「あら、すごいわねえ」とほめてくれます。でも女の子には、お母さんにはないしょにしているすごい秘密がたくさんあって…。電車の中で、「おかあさん、おかあさん、みてみて」と一生懸命話す小さな女の子を見て、子どもはなんでもお母さんに見てほしいんだな、でも、親には絶対に見せない子どもだけのすごい秘密があったらおもしろいな…とって考えました。

「イソガニ 磯太」

東山直美

イソガニ類を飼育している。採集時に手元が狂ってハサミや歩脚が取れて痛ましい姿になることがある。ある時、水槽中の石の上に歩脚の欠けた脱皮殻があった。近くに一回り大きくなったカニがいた。失っていた歩脚は再生していて透明で頼りないものだった。自然界で生き抜くために備わったカニ類の体の仕組みと書物



にあったが見たのは初めてだった。この事実と「失うときに、その価値を知る」と言われていることをからめて絵本にした。物語化に四苦八苦した。

「ばんこ（盤古）（中国の神話）」

ベップヒロミ（別府浩実）（貞静学園短期大学教員）

「ばんこ（盤古）」は、巨神が世界を支えていたという天地開闢の中国の神話です。宇宙は科学で解明され続け、私は、現代の日本社会で生きているにも関わらず、なぜかこの神話に惹かれました。そこで、この神話をどう表現すれば、現代という時代とクロス（交差）した絵本にできるかを試したくなったことが制作の動機です。制作の過程で、概念や感性や思考を図像化し、構成を繰り返すと予想外のビジョンが現れ、表現が展開しました。

「個／群」

宮崎詞美（横浜美術大学ビジュアルデザイン領域准教授）

各々の物語を持つ個と個が空間を共有し関わり合いながら変容し存在し続ける群衆を、変化と伝達と還元の関係を検証しながら再構成し描きます。

「いたずらうさぎと大きな木」

山本希恵（岡山県立大学大学院修士課程）

私は現在、絵本と色の関係をテーマに研究を行っています。特にストーリーと色を関連づけて調査を行っており、本制作も色に関連づけたものになりました。今回制作した『いたずらうさぎと大きな木』は、いたずらを通して知る「大事なもの」をテーマとした絵本です。いたずらが大好きな白うさぎと、それを快く思わない友人の黒うさぎ、そして、いたずらに怒っている森の住民たちのお話になっています。

絵本学会第18回定期総会

日時：2015年5月30日(土) 18:00～18:50

会場：東京工芸大学(東京都中野区)

議長：香曾我部秀幸 書記：本庄美千代

出席者数：76名、委任状提出者数125名

1. 開会の辞

司会を務めた武田美穂理事より開会の辞が述べられ、第18回定期総会が開会した。開会にあたり、出席者数76名、委任状125名の総数が確認され、総会が成立したことが述べられた。

2. 議長・書記選出

議長に香曾我部秀幸氏、書記に本庄美千代が選出された。

3. 会長挨拶

松本猛会長より、第18回定期総会開催にあたり、挨拶が述べられた。

4. 役員の交替について

第18回定期総会にて理事会役員等の交替となるにあたり、松本猛会長が新会長挨拶を行い、引き続き、新役員の紹介がなされた。

5. 新会長挨拶

松本猛会長が、新会長として選出されたことを受け、会長挨拶を述べた。

6. 2014年度活動報告

石井光恵事務局長より、資料に基づき、下記のような2014年度活動報告がなされ、承認された。

◆ 絵本学会 2014年度活動報告

◎ 第17回絵本学会大会の開催

2014年5月31日(土)、6月1日(日)
刈谷市総合文化センター(愛知県刈谷市)
テーマ：「絵本とアートー絵本のつくり手たち、その創造力」
参加者 会員119名、一般107名、学生27名 合計253名

◎ 企画委員会の活動

● 絵本フォーラムの開催

2015年3月22日(日) 日本女子大学(東京都文京区)
テーマ：武田美穂さんと絵本を作ろう
参加者 会員5名、一般14名、学生12名 スタッフ4名
合計35名

◎ 紀要委員会の活動

● 絵本学会研究紀要『絵本学』第17号の刊行

● 2014年度絵本参考文献目録(2014年1月～2014年12月)の作成

◎ 機関誌編集委員会の活動

● 機関誌『絵本 BOOK END 2014』の刊行

◎ 研究委員会の活動

● 研究会の開催

2014年12月6日(土) 板橋区立美術館(東京都板橋区)
テーマ：「字のない絵本を考える」
ゲストスピーカー：
今井良朗(武蔵野美術大学芸術文化学科教授)
山本美希(マンガ家、筑波大学大学院博士後期課程芸術専攻)
参加者96名

● 絵本研究助成(2件、各5万円)

1) 申請代表者：永井雅子
研究課題：「子どもはどのような絵本を読むかー集団での読み聞かせの視点から」

2) 申請代表者：藤本朝巳

研究課題：「伝承文学とイラストレーションの再検討」

◎ 広報委員会の活動

● 『絵本学会 NEWS』の発行

51号(4月)、52号(10月)、53号(3月)

● HPの管理運営

◎ 役員改選選挙

2015年2月19日(木) 会員へ投票用紙発送

3月17日(火) 投票締め切り

3月23日(月) 開票

投票有権者数506名、投票数220名(有効投票数218名、無効投票数2名)

◎ 他学会等との連携

日本児童文学学会、日本イギリス児童文学会との3学会連携推進の検討開始

◎ 「フォーラム・子どもたちの未来のために」との連携活動(実行委員会に参加)

① 2014年10月16日(木) 第1回フォーラム(於：日本出版クラブ会館)に参加

② 2014年12月3日(水) 報道機関へ向けての記者会見(於：参議院議員会館)に参加

③ 2015年3月3日(火) 第1回学習会「特定秘密保護法を、出版の世界から見れば…」(於：専修大学)に参加

◎ 「絵本学研究賞」創設の検討と日本絵本賞との折衝

◎ 日本学術会議協力学術団体への絵本学会の登録についての検討を開始

◎ 入退会

新入会者：個人44名、賛助会員1団体

退会者 36名(除籍者を含む)

* 総会員数：個人491名、賛助会員12団体
(2015年5月28日現在)

7. 2014年度決算・会計監査報告

石井光恵事務局長より、資料「2014年度収支決算報告書」にもとづき、会計報告がなされた。監査担当の佐々木宏子監事より事務局に提出された監査の結果、適正に記載、会計処理がなされていると認める旨の報告がなされた。

8. 2015年度活動計画案について

松本猛会長より、資料に基づき2015年度活動計画案について説明がなされ、承認された。計画の概要は下記の通りである。

◆ 絵本学会 2015年度活動計画

◎ 第18回絵本学会大会の開催

2015年5月30日(土)、5月31日(日)
東京工芸大学中野キャンパス(東京都中野区)
テーマ：『絵本』という交差点

◎ 企画委員会の活動

● 絵本フォーラムの開催

◎ 紀要編集委員会の活動

● 絵本学会研究紀要『絵本学』第18号の刊行

● 2015年度絵本参考文献目録(2015年1月～2015年12月)の作成

◎ 機関誌編集委員会の活動

● 機関誌『絵本 BOOK END 2015』の刊行準備及び刊行

◎ 研究委員会の活動

● 研究会の開催

● 絵本研究助成の指針についての再検討と実施

◎ 広報委員会の活動

● 『絵本学会 NEWS』の発行(年3回の予定)

● HPの管理運営(HPのリニューアル)

◎ 絵本研究賞の創設

● 特別委員会の設置

● 毎日新聞社、公益社団法人全国学校図書館協議会と連携

◎ 日本学術会議協力学術研究団体への絵本学会の登録

◎ 「フォーラム・子どもたちの未来のために」との連携 理事会だけではなく絵本学会としての連携であることが確認された。

◎ 20周年記念事業の検討

◎ 他学会等との連携

日本児童文学学会、日本イギリス児童文学会との2機関との連携推進。

◎ その他

学会設立20周年に向けて、記念事業を企画していく予定である。

9. 2015年度予算案について

石井光恵事務局長より、資料「2015年度収支予算(案)」が示された。昨年度予算との主な変更点として、次の6点が述べられた。

1) 事業活動収入のうち「①受取会費収入」の賛助会員は現在12口だが、今後賛助会員の増加を見込み、15口の収入となっている。

2) 事業活動収入のうち「①受取会費収入」は、会員数480名での会費収入で予算を立案する。

3) 人件費支出のうち「事務局報酬支出」について、繁忙期には臨時出勤を必要とすること等を考慮し、4万円増額する。

4) 印刷製本費支出のうち「研究紀要」について、昨年度の支出に照らして増額する。

5) 広告費支出のうち、「HP更新作業費支出」について、HP更新のため増額する。

6) 投資活動支出のうち、「20周年事業積立金」として500,000円を計上する。

石井光恵事務局長の説明を終え、その結果、原案のとおり了承された。

10. その他の項目について

その他の項目については、審議を必要とする項目が提案されなかったため、審議はなかった。

11. 質疑応答

研究委員会委員長笹本純氏より、研究助成に関する見直しの必要性についてこれまでの経過説明がなされた。例年「1件5万円を3件」とした募集および広報を行ってきたが、研究助成の趣旨に合わない応募や、応募が少ない状況が続いており、2013年度は採択0件、14年度は2件の採択に留まったとのが述べられた。そしてこのような状況に照らして研究助成のあり方について見直しを図る必要があり、新理事会で早急な検討を求むとの発言があった。

12. 閉会の辞

閉会に先立ち、松本猛会長より次年度の大会開催が5月28日、29日の2日間、京都女子大学で開催する予定であることが述べられ、京都女子大学の川勝泰介氏が挨拶を述べた。

その後、石井光恵事務局長より閉会の辞が述べられた。

絵本学会 2014年度収支決算報告書				2014年4月1日～2015年3月31日	
科目	予算額	決算額	増減(予-決)	備考	
I 事業活動収支の部					
1. 事業活動収入					
①受取会費収入	3,700,000	3,733,000	-33,000		
賛助会員	300,000	260,000	40,000	20,000×13口(現在12団体)	
正会員	3,360,000	3,433,000	-73,000	8,000×429名(現在510名)*	
準会員	40,000	40,000	0	2,000×4名+4,000×8名	
②事業収入	260,000	230,700	29,300		
研究活動事業収入	60,000	22,500	37,500		
フォーラム収入	30,000	22,500	7,500	入場者収入	
研究会収入	30,000	0	30,000	参加費収入	
出版事業収入	200,000	208,200	208,200	『絵本 BOOK END 2013』	
③雑収入	130,300	128,730	1,570		
受取利息収入	300	250	50		
入会金収入	80,000	88,000	-8,000	入会金2,000×44名	
雑収入	50,000	40,480	9,520	出版物在庫販売など	
事業活動収入合計	4,090,300	4,092,430	-2,130		

科目	予算額	決算額	増減(予-決)	備考
2. 事業活動支出				
①事業費支出	2,140,000	1,592,116	547,884	
人件費支出	360,000	360,000	0	
事務局報酬支出	360,000	360,000	0	事務局賃金等
事業費支出	1,780,000	1,232,116	547,884	
消耗品費支出	82,000	31,233	50,767	事務消耗品費
印刷製本費支出	803,000	661,500	141,500	
絵本学会ニュース	260,000	228,960	31,040	絵本学会 NEWS 51,52,53号
研究紀要	473,000	388,800	84,200	『絵本学』16号
会員名簿	20,000	0	20,000	新入会追加分
その他	50,000	43,740	6,260	封筒印刷代を含む
通信運搬費支出	257,000	265,942	-8,942	ニュース等発送費・通信費
旅費交通費支出	432,000	222,320	209,680	理事旅費等(理事会4回/年)
会議費支出	10,000	1,425	8,575	
広告費支出	133,000	30,000	103,000	
印刷物制作費支出	51,000	0	51,000	
HP更新作業費支出	82,000	30,000	52,000	
振込手数料	13,000	6,696	6,304	
雑支出	50,000	13,000	37,000	発送アルバイト費
②活動費支出	1,030,000	820,128	209,872	
大会運営補助金支出	300,000	300,000	0	ポスター等制作費を含む
専門委員会活動費支出	580,000	420,128	159,872	
企画委員会	205,000	175,292	29,708	フォーラム等
紀要編集委員会	102,000	103,075	-1,075	紀要編集等**
機関誌編集委員会	90,000	74,459	15,541	『絵本 BOOK END』編集
研究委員会	103,000	57,302	45,698	研究会主催
広報委員会	80,000	10,000	70,000	『絵本学会ニュース』編集
研究助成費支出	150,000	100,000	50,000	5万円×2団体
20周年事業支出	0	0	0	
③出版事業支出	1,240,000	1,250,694	-10,694	『絵本 BOOK END 2014』
編集作業費支出	0	0	0	
制作費支出	1,240,000	1,250,694	-10,694	
事業活動支出合計	4,410,000	3,662,938	747,062	
事業活動収支差額	-319,700	429,492	-749,192	

II 投資活動収支の部			
1. 投資活動収入			
投資活動収入計	0	0	0
2. 投資活動支出			
20周年事業積立金	500,000	500,000	0
投資活動支出計	500,000	500,000	0
投資活動収支差額	-500,000	-500,000	0
III 財務活動の部			
1. 財務活動収入			
長期借入金収入	0	0	0
財務活動収入計	0	0	0
2. 財務活動支出			
長期借入金返済支出	0	0	0
財務活動支出計	0	0	0
財務活動収支差額	0	0	0

IV 予備費支出			
	200,000	0	-200,000
当期収支差額	-1,019,700	-70,508	-949,192
前期繰越収支差額	5,328,333	5,328,333	0
次期繰越収支差額	4,308,633	5,257,825	-949,192

絵本学会 財産目録			2015年3月31日現在
科目	金額		
I 資産の部	1. 流動資産		
現金預金	現金手元有高	433,234	
	普通預金	りそな銀行高槻支店	0
	普通預金	ゆうちょ銀行	121,969
	定額貯金	高槻天王郵便局	2,000,000
	絵本学会振替口座(20周年積立金50万円を含む)	2,594,422	
	未収金	208,200	
	次年度仮払い金(大会運営補助金)	400,000	
	流動資産合計	5,757,825	
資産合計		5,757,825	
II 負債の部	1. 流動負債		
	流動負債合計	0	
負債合計		0	
正味財産		5,757,825	
			次年度繰越金 5,757,825
			計 5,757,825

絵本学会 2015年度収支予算(案)				2015年4月1日~2016年3月31日
科目	予算額	決算額	増減(予-決)	備考
I 事業活動収支の部				
1. 事業活動収入				
①受取会費収入	3,800,000	3,700,000	100,000	
賛助会員	300,000	300,000	0	20,000×15口(現在12団体)
正会員	3,440,000	3,360,000	80,000	8,000×430名(現在約480名)
準会員	60,000	40,000	20,000	4,000×10+2,000×10名
②事業収入	260,000	260,000	0	
研究活動事業収入	60,000	60,000	0	
フォーラム収入	30,000	30,000	0	入場者収入
研究会収入	30,000	30,000	0	参加費収入『絵本 BOOK END 2014』
出版事業収入	200,000	200,000	0	
③雑収入	140,200	130,300	9,900	
受取利息収入	200	300	-100	入会金2,000×45名
入会金収入	90,000	80,000	10,000	出版物在庫販売など
雑収入	50,000	50,000	0	
事業活動収入合計	4,200,200	4,090,300	109,900	
2. 事業活動支出				
①事業費支出	2,552,000	2,140,000	412,000	
人件費支出	400,000	360,000	40,000	
事務局報酬支出	400,000	360,000	40,000	事務局賃金等
事業費支出	2,152,000	1,780,000	372,000	
消耗品費支出	80,000	82,000	-2,000	事務消耗品費
印刷製本費支出	930,000	803,000	127,000	
絵本学会ニュース	260,000	260,000	0	絵本学会 NEWS 54,55,56号
研究紀要	500,000	473,000	27,000	『絵本学』17号
会員名簿	20,000	20,000	0	新入会追加分
その他	150,000	50,000	100,000	封筒印刷代を含む
通信運搬費支出	260,000	257,000	3,000	ニュース等発送費・通信費
旅費交通費支出	432,000	432,000	0	理事旅費等(理事会5回/年)
会議費支出	10,000	10,000	0	
広告費支出	330,000	133,000	197,000	
印刷物制作費支出	50,000	51,000	-1,000	
HP更新作業費支出	280,000	82,000	198,000	
振込手数料	10,000	13,000	-3,000	
雑支出	100,000	50,000	50,000	事務局移転に伴う経費分を含む
②活動費支出	1,430,000	1,030,000	400,000	
大会運営補助金支出	400,000	300,000	100,000	ポスター等制作費を含む
専門委員会活動費支出	580,000	580,000	0	
企画委員会	200,000	205,000	-5,000	フォーラム等
紀要編集委員会	100,000	102,000	-2,000	*紀要編集等
機関誌編集委員会	100,000	90,000	10,000	『絵本 BOOK END』編集
研究委員会	100,000	103,000	-3,000	研究会主催
広報委員会	80,000	80,000	0	『絵本学会ニュース』編集
研究助成費支出	150,000	150,000	0	
20周年事業支出	300,000	0	300,000	
絵本研究賞	300,000	0	300,000	**20周年事業として以後継続
③出版事業支出	1,250,000	1,240,000	10,000	『絵本 BOOK END 2014』
編集作業費支出	0	0	0	
制作費支出	1,250,000	1,240,000	10,000	
事業活動支出合計	5,232,000	4,410,000	822,000	
事業活動収支差額	-1,031,800	-319,700	-712,100	
II 投資活動収支の部				
1. 投資活動収入				
投資活動収入計	0	0	0	
2. 投資活動支出				
20周年事業積立金	500,000	500,000	0	
投資活動支出計	500,000	500,000	0	
投資活動収支差額	-500,000	-500,000	0	
III 財務活動の部				
1. 財務活動収入				
長期借入金収入	0	0	0	
財務活動収入計	0	0	0	
2. 財務活動支出				
長期借入金返済支出	0	0	0	
財務活動支出計	0	0	0	
財務活動収支差額	0	0	0	
IV 予備費支出				
	200,000	200,000	0	
当期収支差額	-1,731,800	-1,019,700	-712,100	
前期繰越収支差額	5,257,825	5,328,333	-70,508	
次期繰越収支差額	3,526,025	4,308,633	-782,608	

* 紀要編集等 ⇒ 2014年度より、絵本研究参考文献目録作成費として50,000円を含む

** 絵本研究賞の事業は、20周年事業として開始し、以後継続事業となる

★ 2014年度絵本フォーラム報告



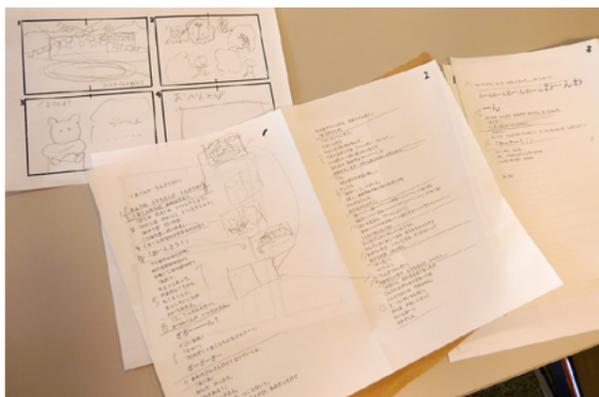
「武田美穂さんと絵本を作ろう！」

日時：2015年3月22日(日) 14:00～
会場：日本女子大学目白キャンパス

2015年3月22日(日)、絵本作家の武田美穂さんを講師にお迎えして、絵本フォーラム「武田美穂さんと絵本を作ろう！」を開催しました。子どもたちの心情や日常を、ユーモアをまじえて、明るく温かく描き出した武田美穂さんの絵本は、子どもや子どものそばにいる大人からも絶大な支持を得ています。その武田さんが絵本の作り方を教えてくださいということで、当日は、保育所や小学校に通う子どもたちから、保育や教育について学ぶ大学生、さらには多様なフィールドで働く大人たちまで、年齢も活躍の場も異なる35名が会場に集い、絵本作りを楽しみました。

武田美穂さんの代表作『となりのせきのますだくん』(ポプラ社、1991)は、物語やキャラクターの魅力に加えて、吹き出しやコマを用いた構成や子どもたちの心を反映した構図が印象深い絵本です。今回注目したのも、テキストを「コマ割り(場面割り)」するという工程で、どのように見せていくのかを考えることから絵本作りが始まりました。

武田さんが用意してくださった3つのテキスト、「つるのおんがえし」、「ふわふわくん」、「くまくんの うんどうかい」が参加者に手渡され、そのうちひとつを選んで絵本にしていきます。このテキストには、会話が長く、さまざまな書体や大きさの文字が混じっていました。ストーリーだけではなく、創作のヒントがこちらこちらに隠れているものでした。



まず、武田美穂さんが「場面割り」についてホワイトボードに絵を描きながら説明してください、その後、今回の絵本の作り方を教えてくださいました。手順がわかったところで、参加者は、ラフコンテを描いていきます。文章をどのようにわけなのか、どこに配置するのか、絵はどのような構図や色で描いていくのかなど、頭をひねり、楽しみながら、絵本の設計図を作っていました。なお、テキストは自由にアレンジして構いません。

さてラフコンテができたら、画用紙を使って本描きをします。今回使用した材料は、画用紙、糊、製本テープでした。まずは画用紙を半分折って、裏面に糊を貼り合わせて本を作っていきます。最後に製本テープで背を包むと絵本の完成です。

子どもたちの創作ペースはとても早く、あっという間に1冊ができあがったり、自作のストーリーで絵本を作る子どももいたり、参加者のみなさんは、最初、そのパワーに圧倒されていました。しかし大人も負けていませんでした。絵本を愛するみなさんは、自分だけの絵本を目指して、

武田さんのアドバイスを
受けながら、場面割り
やキャラクターを工夫し
て、絵本を作り上げてい
きました。

今回の絵本フォーラムの雰囲気は、和やかで笑いに溢れていました。「絵を描く」というと私

たちは身構えてしまいがちですが、絵本作りのはじめに、武田さんが準備体操のようなレッスンをしてくださいました。武田さんが出すお題に応じて、すばやく絵を描くというもので、「とり!」「さかな!」など、誰もがよく知っているものですが、いざ描くと「どうだったかな?」と戸惑うものを、迷う時間も与えられずに描いていきました。自分や隣に座った人たちのでき上がりに大笑いしたり、驚いたり、感心したりしながら、頭と身体をほぐしてから、絵本を作ることができました。

そうして完成させた絵本をみんなの前で披露しました。同じテキストを選んで、場面割りやアレンジによって違うお話のように楽しめるから不思議です。絵本の読み方にも個性があり、つい引き込まれてしまう独創的な作品や大笑いの展開もありました。夢中になった子どもたちが自分の席を離れて、どんどんどんどん絵本に近づいて、歓声をあげる姿もありました。

終了の予定時刻を1時間以上が過ぎても、なお参加者の多くが会場に残り、絵本を作り上げ、完成した絵本と一緒に読みました。作るだけでなく、作ったものを武田美穂さんや世代の異なる人々と共に楽しむ経験は、絵本作家を目指す方々にとって有意義なものであったのではないのでしょうか。

武田美穂さん、ご参加いただいたみなさま、楽しいフォーラムを共に作り上げていただき、ありがとうございました。
(企画・記録：2014年度企画委員会、武田美穂、原島恵、今田由香)



事務局からのお知らせ

● 2015年度 第1回絵本学会理事会 議事録

日時：2015年4月12日(日) 13:30 - 15:45
会場：日本女子大学 新泉山館 4階 児童学科会議室

出席者：松本猛、石井光恵、今田由香、香曾我部秀幸、笹本純、佐藤博一、藤本朝巳、本庄美千代、陶山恵(第18回大会事項のみ)

○報告事項

1. 会長より

会長より、平成27年度第1回理事会開催について、挨拶がなされた。

2. 前回(第5回絵本学会理事会)議事録の確認

第5回理事会の議事録が承認された。

3. 事務局より

下記7点について、事務局から報告がなされた。

・「フォーラム・子どもたちの未来のために」第1回学習会「特定秘密保護法を、出版の世界から見れば…」(2015年3月3日・火曜日、於・専修大学、講師：山田健太)に、絵本学会として事務局関係者及び会員が出席。

・絵本学会 NEWS No.53の発送が3月6日に終了。

・第18回大会研究・作品発表の締め切りを3月10日に行った。その際、今年度は例年になく研究発表資格を獲得するため、駆け込み入会が相次いだ。発表申し込み時の会員資格の確認、また発表締め切り直前に入会希望についての検討が今後の課題として必要となっている。新理事会への申し送り事項とする。

・2015年役員選挙終了の報告がなされた。2015年度の役員選挙は、2月19日に会員へ関係書類発送、3月17日(火)投票締め切り、3月23日(月)午前10:00～12:00に選挙管理委員によって開票の手順で行われた旨の報告がなされた。選書の結果、投票有権者数506名、投票数は220名、有効投票数218名、無効投票数2名。開票の結果、上位7名の、松本猛(173票)、生田美秋(150票)、澤田精一(133票)、佐藤博一(113票)、永田桂子(105票)、本庄美千代(99)、和田直人(98票)の各氏が新理事となった。また、幹事には香曾我部秀幸(190票)、千田篤(173票)の各氏が選任された。

・3月27日(金)日本絵本賞授賞式に、会長とともに事務局長の石井も出席した。

・4月末に大会案内及び絵本学会 NEWS No.54の発送を予定している旨についての報告。

・紀要「絵本学」の発送予定について、紀要委員会と今後を検討していく旨の報告。

4. 各委員会報告

1) 企画委員会

企画委員会の今田理事より、3月22日(日)開催された「絵本フォーラム2015 - 武田美穂さんと絵本を作ろう」について、報告がな

された。出席者は31名。人数は少なかったが、いろいろな方々の出席があった。武田美穂さんの指導で、参加者も絵本作りを楽しめたフォーラムであった。

2) 紀要編集委員会

紀要委員会の香曾我部理事より、「絵本学」17号の進捗状況について、報告があった。

3) 機関誌編集委員会

ブックエンドが今年も販売があり収益のあった旨報告された。また、まだその料金が朔北社より入金されていないことも併せて報告された。

4) 研究委員会

研究助成について笹本理事より、現在の状況と今後の検討課題についての意見が述べられた。意見交換をした結果、新理事会で研究助成金の意義や指針を明確化することを申し送り事項として提案し、そのたたき台の案を笹本理事が作成することになった。また、2015年度の活動計画にからみ、総会で笹本理事から会員へ報告・説明していくことになった。

従って、絵本学会 NEWS No.54には研究助成金の募集を掲載しないことになった。

5) 広報委員会

広報委員会の今井理事が欠席のため、「絵本学会 NEWS No.54」の発行に関わって掲載原稿等の今井理事からの伝言が伝えられた。佐藤理事から、次回の NEWS は急がず発行したい旨の提案がなされ、NEWSの適切な発行時期に等について、意見交換がされた。次回 NEWS は大会関連の発送とは別に、紀要と一緒に5月に発行することになった。

5. 事業後援について

下記2件の事業後援を行った旨の報告がなされた。

・ちひろ美術館・東京「没後10年「長新太の脳内地図」

・安曇野ちひろ美術館「戦争を描いた日本の絵本展」

6. 寄贈本について

下記1冊の寄贈本が絵本学会へなされた旨、報告された。

①童美連「日本児童出版美術家連盟作品集 WHO'S WHO No.7 創立50周年記念号」

②延藤安弘著『こんなまちに住みたいナー絵本が育む暮らし・まちづくりの発想』晶文社

③イルフ『日本童画大賞受賞作品集』

○審議事項

1. 第18回絵本学会大会について

大会事務局の陶山恵氏より、当日資料4枚(登壇者のプロフィール、チラシ、会員への連絡、研究発表部屋割り案)が配付され、その資料に沿って順次検討された。

・チラシについて

開催校の東京工芸大学で、共催として援助金ができることになった場合は、チラシに共催と入れる。チラシは、1000部刷り700部を事務局へ送る。ポスターは制作しない。ラウンドテーブルBの武

田美穂氏の肩書から、絵本学会理事を除く。

・タイムスケジュールの確認があった。

・研究発表・作品発表の座長が下記のように決定した。

1 日目A室 香曾我部秀幸、B室 藤本朝巳

2 日目A室 生田美秋・今田由香、B室 石井光恵、C室 永田桂子

・書籍の販売希望について

大会事務局としては、スペースの提供のみとする。学会関係のものは、事務局が販売する。書籍販売は、大会事務局からこどものとも社に交渉することになった。こどものとも社が扱わない書籍については、各自売り子を用意して販売することを販売希望者には伝える。

また、書籍販売に伴いサイン会を計画することになった。
・HPでの告知について
①HPで大会の開催について告知する。
②プレスリリースについて

毎日新聞、読売新聞、朝日新聞、雑誌モエなど他にも広報することが話し合われた。
・交流会場の変更について
大学の事情から、2号館より芸術情報館へ変更することになった。大学の事情からの変更のため、他に1室用意してくれることになり、そこに昼食の会場と書籍売り場を設定する予定であることが、併せて報告された。

・交流会場の変更について

大学の事情から、2号館より芸術情報館へ変更することになった。大学の事情からの変更のため、他に1室用意してくれることになり、そこに昼食の会場と書籍売り場を設定する予定であることが、併せて報告された。

2. 入退会者について（12月25日～4月5日分）

下記の入退会者について、承認された。

入会者：馬場南（修士）、内藤知美、久保田知恵子、村上康成、位頭久美子、松本由美、浅川陽子、穴澤秀隆、谷口広樹、佐藤みづき（修士）、山本希恵（修士）、尾木沢響子（空とこども絵本館）、田中隆臣（学生） 計 13 名

退会者：村上淳子、椿奏重、畠山兆子、篠原康枝、キム・ファン、竹内千代子、田中元基、いしらゆうこ、米山博子、小林裕子、木村芳子 計 11 名

3. 絵本学会・日本イギリス児童文学会・日本児童文学学会の協力について

絵本学会・日本イギリス児童文学会・日本児童文学学会の協力について、連絡係を務めている藤本朝巳理事より、配付資料をもとに説明がなされた。2015年度の活動として、2015年11月7日(土) 14:40～16:30（大阪教育大学柏原キャンパス）に日本児童文学学会で開催が予定されているシンポジウム「児童文学研究のこれからを考える（仮）」に、絵本学会・日本イギリス児童文学会・日本児童文学学会の三学会の研究動向を報告し、これからの児童文学研究について考える（登壇者3名程度）という案が紹介され、今後の協力体制などについては新理事会で継続検討していくことになった。連絡係は、当面は理事終了後も引き続き藤本氏が担当することになった。

4. 紀要「絵本学」のカラー図版について

香曾我部理事より、継続の検討事項になっていたカラー図版の自己負担については、新理事会での検討に任せ、今回は従来通り自己負

担とするとの提案がなされ、了承された。

5. 第18回絵本学会大会定期総会議案について

下記定期総会での議案について配付資料をもとに検討がなされた。

① 2014年度活動報告案（資料）

② 2014年度決算案（資料）

③ 2015年度活動計画案（資料）

・研究助成について、そのあり方を検討することになった。

・ホームページのリニューアルについて、新理事会で検討することになった。

④ 2015年度予算案（資料）

・絵本研究賞について、30万円を予算化する。

・ホームページのリニューアルに25万円と、リニューアル完成までの維持費として例年通り3万円を予算化する。計28万円の計上。
・研究助成金の備考に、5万円×3団体の表記をしない。

6. 事務局の移転に伴う、資料の保管について

新事務局への移転に伴い、年々膨らんでいく過去の資料保管のためトランクルームを借りてはどうかという提案が、事務局よりなされ、検討された。武蔵野美術大学に、絵本学会として保存しておかなければならない資料は保管されている。それ以外の事務局関連の書類や「絵本学」、「ブックエンド」、「絵本学会NEWS」のバックナンバーであるが、今回も前回移転時と同じように整理し、トランクルームについては、新事務局の事情も併せ、新理事会で検討事項とすることになった。

7. 次回理事会開催日程

次回の理事会は、新旧合同理事会で、下記のように開催することになった。

2015年5月30日(土) 午前10:00～ 東京工芸大学

● 絵本学会新理事会（準備会） 議事録

日時：2015年4月12日(日) 15:55－17:30

会場：日本女子大学 新泉山館 4階 児童学科会議室

出席者：香曾我部秀幸（審議開始までの司会）、生田美秋、佐藤博一、澤田精一、永田桂子、本庄美千代、松本猛、和田直人、石井光恵（事務局）

1. 新理事の自己紹介及び、会長・事務局長の決定について

香曾我理事の司会で、新理事の自己紹介が行われた。その後、新会長について話し合わせ、全員の賛成で、松本猛氏が新会長に決定した。

2. 指名理事について

新会長決定後、司会は松本猛新会長が担当し、以下4議題に沿って審議がなされ、下記のように決定した。

・理事の指名(3名)について

3名の指名理事について検討された結果、陶山恵（東京工芸大学准教授）、村上康成（絵本作家）、松本育子（刈谷市美術館館長代理）

の各氏をお願いすることになった。次期事務局長として、陶山恵氏が推薦された。

3. 各委員会の委員長と各理事の役割分担について

5委員会の委員長と各理事の役割が下記のように決定した。

- | | |
|--------------|-----------------------|
| (1) 企画委員会 | 委員長 和田直人
村上康成、澤田精一 |
| (2) 紀要編集委員会 | 委員長 永田桂子 |
| (3) 機関誌編集委員会 | 委員長 生田美秋 |
| (4) 研究委員会 | 委員長 本庄美千代、松本育子 |
| (5) 広報委員会 | 委員長 佐藤博一 |

・絵本研究賞の委員会立ち上げについて

松本新会長より、絵本研究賞の立ち上げについては、現在ある委員会が協力してこれに当たることが望ましいのではないかという提案がなされた。その提案も含め、今後新理事会で検討していくことになった。

4. 新理事会の会合について

指名理事を加えた新理事の会合を、5月29日(金)に東京工芸大学で開くことになった。

● 2015年度 絵本学会合同理事会(第2回理事会) 議事録

日時：2015年5月30日(土) 10:00－12:00

会場：東京工芸大学

出席者：松本猛、石井光恵、生田美秋、今田由香、今井良朗、香曾我部秀幸、笹本純、佐藤博一、澤田精一、陶山恵、武田美穂、永田桂子、藤本朝巳、本庄美千代、松本育子、村上康成、和田直人

○会長挨拶

2015年度新旧合同理事会(第2回理事会)開催にあたり、会長より挨拶があった。

○報告事項

1. 前回議事録の承認

誤字や氏名等記載ミスの訂正後、第1回理事会、新理事会（準備会）の議事録が承認された。

2. 第18回絵本学会大会について

大会実行委員会(陶山恵委員長)から、第18回大会について、委任状125通、参加者については現在集計中との報告があった。

3. 事務局より

事務局より下記の報告があった。

・大会関連の発送を予定通り4月23日に行った。

・「絵本学会NEWS54号」と「絵本学」及び会費納入のお願いの発送は、紀要と一緒に5月21日に行った。

・「フォーラム・子どもたちの未来のために」関係情報として、7月

6日に第2回学習会が開催される旨の連絡がなされた。会長からも「フォーラム・子どもたちの未来のために」の活動の現況報告と、学習会への参加呼びかけがあった。

・後援事業として、ちひろ美術館・東京「日ブラジル外交関係樹立120周年 旅する芸術家 ホジェル・メロ展」とちひろ美術館・安曇野「〈企画展〉いわさきちひろ×佐藤卓＝展 ―はじめて見るちひろの世界―」の2後援を行った旨の報告がなされた。

・いわさきちひろ記念事業団よりの、「長新太の脳内地図展」の巡回についての後援申請書があり、これについても一括して承諾した旨の報告がなされた。

・下記3冊の献本があったことが報告された。

千森幹子著『表象のアリス』法政大学出版局

中川素子文、スタシス絵『アウスラさんのみつあみ道』石風社
東京美術 『長新太の脳内地図』（「長新太の脳内地図」展の図録兼用図書）

4. 各委員会報告

各委員会より、下記のような報告があった。

1) 企画委員会

新企画委員会への引き継ぎをメールによって終了した。3月に行われたフォーラムの報告を次回絵本学会NEWSに掲載する予定である。

2) 紀要編集委員会

第17号を4月中に完成し、会員への配付を終了。絵本研究参考文献目録が充実したものになった。

3) 機関誌編集委員会

2014年度への引き継ぎを生田理事と進めている。

4) 研究委員会

引き継ぎは、研究委員会を引き続き担当する本庄理事との間で終了。研究助成の件については、総会で求められれば、笹本理事より説明をする。

5) 広報委員会

Webサイトや絵本学会NEWSについては、引き続き広報担当の佐藤理事と引き継ぎをする。

絵本学会NEWS54号を発行した旨の報告があった。また、絵本学会NEWSは第54号から、会員増のため100部増刷とし、600部となった旨の報告がなされた。

5. 指名新理事の紹介

新理事として指名された理事3名、陶山恵、村上康成、松本育子の各氏について会長より紹介があった。

その後、新旧理事の自己紹介が行われた。

6. 各委員会(新)の新委員の選任報告

各新委員会より、委員の選出状況が報告された。

1) 企画委員会：和田直人理事を委員長とし、村上康成理事を加え、澤田精一理事と三人体制で臨むことになった。他の委員については、現在調整中である旨の報告があった。

2) 紀要編集委員会：永田桂子委員長より、紀要編集委員に丸尾美保氏、水島尚喜氏をお願いし承諾された旨の報告があった。

<p>3) 機関誌編集委員会：生田美秋委員長より、編集委員を現在の3名から6名に増員し、編集長 生田美秋（理事、世田谷文学館）、副編集長 鈴木穂波（岡崎女子短期大学）、編集委員 浅木尚実（淑徳大学短期大学部）、申明浩（武蔵野美術大学）、永井雅子、神谷友とすることになった旨の報告があった。</p> <p>4) 研究委員会：本庄美千代委員長の下に、松本育子理事が加わることになった。他の委員については現在調整中である旨の報告があった。</p> <p>5) 広報委員会：Web サイトやNEWSのあり方などを今後検討していくことも含め、委員を調整中であることが、佐藤博一委員長より報告があった。</p>	<p>5. 20周年記念事業について</p> <p>絵本研究賞の創設とそれにかかわる業務を担当する委員会について話し合いが行われた。研究委員会と紀要編集委員会と会長で絵本研究賞を担当する委員会を作るという案が出された。</p>												
<p>○審議事項</p> <p>1. 第18回絵本学会大会総会議案について</p> <p>・2014年度活動報告、2014年度決算報告、2015年度活動計画（案）、2015年度予算（案）についての最終確認が行われた。</p> <p>・総会での報告担当者は、司会を武田美穂、立候補者が出なかった場合には、議長に香曾我部秀幸理事、書記に本庄美千代理事を推薦し、2014年度活動報告と2015年度活動計画(案)については松本猛会長、2014年度決算報告と2015年度予算(案)の説明は石井光恵事務局長が行うことになった。また、役員の交替と新理事の紹介を松本会長より行うことになった。</p>	<p>6. 事務局移転の周知について</p> <p>事務局の移転に伴い、新事務局の連絡先の周知について、会員向けには現事務局よりハガキを出すことになった。一般向けとしては、HPにて行うことになった。</p>												
<p>2. 会員の入退会の承認について</p> <p>会員の入退会について下記のように承認された。(敬称略)</p> <p>・入会者：今井秀司、加藤万也、小松麻美、宮下美砂子、神林真理、上牧清美、大畑順子、熊谷衿佳、相馬奈於、鈴木さやか、梶原瑞貴、横田由紀子、布山季里、黒岩靖子、北森芳徳 計15名</p> <p>・退会者：いしらゆうこ、大槻美智子、キム・ファン、木村芳子、小林裕子、篠原康枝、鈴木宏枝、宗宮囿子、瀧薫、竹内千代子、田中元基、椿奏重、畠山兆子、濱野恵子、舟橋斉、村上淳子、森谷恭子、米山博子 計18名</p> <p>・除籍者：荒井直美、荒川稔、石原祐子、小川博久、権田永一、佐野之美、芝田史仁、嶋田真由美、管まき子、滝口瑞穂、谷哲夫、綱美恵、土井あゆみ、内藤智津、中川亜沙美、福地薫、吉島紀江、若松千恵子 計18名</p>	<p>7. 新事務局への引き継ぎ日程について</p> <p>総会終了後、現事務局と新事務局で日程を調整して決めることになった。</p>												
<p>3. 会員からの寄稿文書の転載許可願について</p> <p>吉田新一会員より寄稿文書の転載許可願の出ていた、機関誌『絵本BOOK END』掲載の「イギリスの児童文学の興行きを代表する作家、ピアトリクス・ポター」について、『連続講座 絵本の愉しみ』第3巻「ピーターラビットの絵本」（朝倉書店）への転載を承諾することになった。</p>	<p>8. 各委員会の引き継ぎについて</p> <p>引き継ぎは各員会で進めているが、今後必要に応じて各委員会間で適宜行っていくことになった。</p>												
<p>4. 事務局移転に伴う保管資料の処分について</p> <p>現事務局で保管している学会の発行物『絵本BOOK END』、「絵本学」、「NEWS」のバックナンバーについて、今後はアーカイブとして武蔵野美術大学図書館で各20部保管、新事務局へは販売用として各20部送り、残りの残部は適宜処分していくことになった。</p>	<p>9. 日本イギリス児童文学会、日本児童文学学会、絵本学会連携の試みについて</p> <p>下記のことが承認された。</p> <p>日本イギリス児童文学会、日本児童文学学会、絵本学会連携の最初の試みとして、三学会とのコラボ・シンポジウム（仮称）を開催する。全体のテーマ：「児童文学研究の動向」 サブテーマ：(戦後70周年を考慮し) 戦争と平和を考える児童文学」</p> <p>キーワード：「幼年文学」（などを題材に)</p> <table> <tbody><tr> <td>登壇者：</td> <td>日本イギリス児童文学会</td> <td>藤本 朝巳</td> </tr> <tr> <td></td> <td>絵本学会</td> <td>佐藤 博一</td> </tr> <tr> <td></td> <td>日本児童文学学会</td> <td>佐藤 宗子</td> </tr> <tr> <td></td> <td>コーディネーター</td> <td>三宅 興子</td> </tr> </tbody></table> <p>なお、絵本学会からの渉外委員として、2015年度より藤本朝巳氏に加え、生田美秋新理事が加わることになった。</p>	登壇者：	日本イギリス児童文学会	藤本 朝巳		絵本学会	佐藤 博一		日本児童文学学会	佐藤 宗子		コーディネーター	三宅 興子
登壇者：	日本イギリス児童文学会	藤本 朝巳											
	絵本学会	佐藤 博一											
	日本児童文学学会	佐藤 宗子											
	コーディネーター	三宅 興子											
<p>○次回の理事会の開催日程</p> <p>下記の日程で次回理事会が開催されることになった。</p> <p>日時：2015年7月5日(日) 14:00～16:00</p> <p>会場：東京工芸大学</p>													
<p>●2015年度 第3回絵本学会理事会 議事録</p> <p>日時：2015年7月5日(日) 14:00～</p> <p>会場：東京工芸大学 中野キャンパス2号館3階アトリエ2</p> <p>出席者：松本猛（会長）、陶山恵（事務局長）、生田美秋、佐藤博一、澤田精一、永田桂子、本庄美千代、松本育子、和田直人</p> <p>委任：村上康成</p>													
<p>○報告事項</p> <p>1. 会長挨拶</p> <p>松本猛会長より、新理事会の方針について発言があった。</p>													

<p>2. 前回理事会議事録の確認</p> <p>第2回絵本学会理事会（新旧合同理事会）の議事録が承認された。</p>	<p>討し、申請枠と申請方法について見直しははかれる事となった。</p> <p>5) 広報委員会</p> <p>構成員は、佐藤博一（委員長／理事）、正木賢一（東京学芸大学）の二名。年間活動計画と、学会NEWSの発行計画が報告された。学会ウェブサイトについては専用の契約を取り、リニューアルを実施することとなり、用意出来次第、告知を行うこととなった。</p>
<p>3. 各委員会報告</p> <p>各委員会より、構成員および年間活動計画が報告された。</p> <p>1) 企画委員会</p> <p>構成員は、和田直人（委員長／理事）、澤田精一（理事）、村上康成（理事）、の三名。平成27年度フォーラムについては、村上委員の担当として企画中であり、絵本作家の鼎談・ワークショップの開催を計画している。会場として、東京工芸大学の諸施設の利用が可能であることが確認された。</p> <p>2) 紀要編集委員会</p> <p>構成員は、永田桂子（委員長／理事）、丸尾美保（梅花女子大学）、水島尚喜（聖心女子大学）の三名。2015年度学会紀要「絵本学No.18」の制作スケジュールについて報告され、投稿論文の取扱について事務局から委員会へと渡されることが確認された。</p> <p>前年度の紀要編集委員会よりの引き継ぎ検討事項として、カラー図版の経費負担の件と原稿分量の見直しがあがっている。カラー図版の経費負担については、来年度予算作成の際に検討することとなった。文献目録は、現在は「報告」のカテゴリーにあるが、これを別立てにすることを検討することとなった。</p> <p>3) 機関誌編集委員会</p> <p>構成員は、生田美秋（委員長／理事）、鈴木穂波（副委員長／岡崎女子短期大学）、浅木尚美（淑徳大学短期大学部）、申明浩（武蔵野美術大学）、永井雅子、神谷友の六名。朔北社との打ち合わせを行い、支払いの規約を変えてほしいという提案を受けている旨の報告があった。また、絵本学会機関誌『絵本BOOK END』の編集方針について、年間活動計画についての報告があった。また、会員向けアンケートの配布計画について説明があった。</p> <p>4) 研究委員会</p> <p>構成員は、本庄美千代（委員長／理事）、松本育子（副委員長／理事）、みつじまちこの三名。年間活動計画と、研究会開催計画、研究助成計画についての報告があった。「研究会」は企画委員会との連携を含めて計画することされ、会場として、東京工芸大学の諸施設の利用が可能であることが確認された。研究助成については現状を再検</p>	<p>○審議事項</p> <p>1. 絵本研究賞について</p> <p>学会発足20周年を記念して創設する予定の絵本研究賞について、会長、紀要編集委員理事、研究委員理事、事務局合同の五名により特別委員会を設置し、準備をすることとなった。絵本研究賞については、研究論文を大賞とするものとし、特別賞の設置も検討する事となった。</p>
	<p>2. 日本学術会議協力学術研究団体の登録について</p> <p>広報委員長が主担当となり、登録に向けて実務を進めることとなった。</p>
	<p>3. 第19回絵本学会大会について</p> <p>京都女子大学にて2016年5月28日(土)・29日(日)に開催されることとなった。大会実行委員会委員長は川勝泰介会員、担当理事は佐藤博一と決定した。</p>
	<p>○その他</p> <p>・フォーラム「こどもたちの未来のために」が7月6日に開催されることが報告され、総会での承認事項として賛同団体の表記「絵本学会理事会」から「理事会」を抜き、「絵本学会」と記されることを確認した。</p> <p>・BIB 50周年に対する対応については、次回理事会での審議事項とすることとなった。</p>
	<p>○次回理事会の開催日程</p> <p>下記の日程で次回理事会が開催されることになった。</p> <p>日時：2015年10月4日(日) 14:00～</p> <p>会場：東京工芸大学 中野キャンパス2号館3階アトリエ2</p>

<p>●企画委員会からのお知らせ</p> <p>2015 絵本フォーラム</p> <p>鼎談「自然と社会と絵本と。」飯野和好＋はたこうしろう＋村上康成</p> <p>司会：松本猛 コメンテーター：原島恵</p> <p>2015年11月29日(日) 東京工芸大学 中野キャンパス</p> <p>定員100名 参加費500円 絵本販売・サイン会あり 参加申込みはメールか往復ハガキで絵本学会事務局へ</p>

<p>●研究委員会からのお知らせ</p> <p>2015年度 絵本研究会</p> <p>ーしかけ絵本を中心にー 視覚表現、造形手法 もうひとつの見方</p> <p>ゲストスピーカー：今井良朗、渡邊千夏 司会：本庄美千代</p> <p>2015年12月12日(土) 日本女子大学 目白キャンパス</p> <p>定員72名(先着順) 参加費無料 事前申込み不要</p>
--

<p>●絵本学会ホームページURL、絵本学会事務局メールアドレスが新しくなりました。</p> <p>絵本学会ホームページURL http://www.ehongakkai.com / 絵本学会事務局E-mail: office@ehongakkai.com</p>

「日本絵本研究賞」創設のお知らせ

この度、公益社団法人全国学校図書館協議会、毎日新聞社、絵本学会は、新たに「日本絵本研究賞」を創設することとなりました。詳細は学会ホームページをご確認ください。

第1回 日本絵本研究賞募集要項

●募集目的：1997年に創設された絵本学会は、2017年に創立20周年を迎えます。これを記念して、さらなる絵本研究や評論活動の活性化を図るため、公益社団法人全国学校図書館協議会、毎日新聞社、絵本学会は、新たに「日本絵本研究賞」を創設することとなりました。つきましては、優れた研究論文や評論を募集いたします。

●テーマ：絵本についての研究論文や評論

●募集対象：2015年10月1日(木)から2016年9月30日(金)に発表された研究論文や評論。但し、個人レベルの発表(ブログ等)は除く。

●応募方法：

原稿分量：日本語で4000字から16000字程度(註・引用文献・参考文献を含む。図表・写真・表などの図版は別)

原稿体裁：提出後の内容変更や加筆修正は認めません。表紙は別紙として、執筆者氏名(著者名/ローマ字を併記)、題目(著書・論文・図録等書名/和文と英文)、掲載誌・出版社等名、内容要旨(400字以内)、年齢、所属機関または肩書、連絡先を明記してください。掲載誌(書籍等)1冊および抜き刷り3部(コピー可)

受付期間：2016年10月1日(土)から10月15日(土) 締切厳守
※自薦・他薦を問いません。

※ご推薦いただく場合には、絵本学会ウェブサイトより所定の書式をダウンロードし、応募原稿に添付してください。

●選考委員(敬称略)：

今井良朗(武蔵野美術大学教授、元絵本学会会長)
駒形克己(グラフィックデザイナー・造形作家・絵本作家)
澤田精一(元福音館書店編集者・絵本学会理事)
三宅興子(英国児童文学研究者、梅花女子大学名誉教授、元絵本学会会長)
本庄美千代(武蔵野美術大学 特別講師 研究担当司書、絵本学会理事、日本絵本研究賞特別委員会委員長)
磯部延之(公益社団法人全国学校図書館協議会 調査部長)
小島明日奈(毎日新聞社執行役員 東京本社「教育と新聞」推進部長)

●発表：2017年3月下旬全国学校図書館協議会発行の『学校図書館』誌上および『学校図書館速報版』紙上、毎日新聞紙面、絵本学会ウェブサイト(直近で発行予定の「絵本学会 NEWS」、機関誌『絵本 BOOK END』にも掲載)

表彰式は2017年3月下旬(予定)に東京都内において行う。

●表彰：日本絵本研究賞 / 日本絵本研究賞 奨励賞

●応募あて先および問い合わせ先：

〒164-8678 東京都中野区本町 2-9-5
東京工芸大学芸術学部 陶山研究室気付 絵本学会事務局
E-mail: office@ehongakkai.com

・メールによるお問い合わせの際には、件名に【日本絵本研究賞】と必ず書きをしてください。

・応募に際しては送付先を明記した封筒に「日本絵本研究賞応募」と朱書きしてください。

・引用物の著作権にかかわる問題は応募者の責任とします。

・応募原稿等は返却しません。

・輸送中の紛失、破損等の事故に関して絵本学会は責任を負いません。

第19回絵本学会大会のご案内

第19回絵本学会大会は2016年5月28日(土)・29日(日)、京都女子大学[京都市東山区今熊野]を会場として開催されます。

●ご宿泊は参加者各自でお早めにご予約ください。
●今回は研究発表・作品発表の応募資格が変更されましたので、以下要項をご確認ください。

第19回 絵本学会大会 研究発表募集要項

1. 発表者の資格(応募資格)：

絵本学会の会員で、2015年度までの会費を納入済であること。新規入会者の場合は、2016年1月29日(金)の時点で入会手続きが完了していること。

2. 発表テーマ：

絵本及び絵本に関連のある研究テーマで未発表のもの

3. 発表時間：

発表 20 分間 質疑応答 10 分間

4. 申し込み要領：

①発表テーマ、②発表者の氏名・住所・電話 FAX 番号・メールアドレス、③所属機関名・職業など、④発表要旨(800字程度/大会プログラム用原稿)、⑤発表時に使用する機材(パソコン、PC プロジェクター、書画カメラ等)、以上の①～⑤について、文書化したものを絵本学会事務局宛に郵送またはメールでお届けください。

5. 申し込み期間：

2016年2月10日(水)～3月10日(木) [期間内に必着]

6. 発表者の決定：

研究発表は、原則として無審査とします。発表順・時間等は、4月末までにお知らせします。

*受理した原稿等は返却しませんので、必ず控えをとってください。

第19回 絵本学会大会 作品発表募集要項

大会会場に会員の作品を展示し、会期中の所定の時間に出品者自らが制作趣旨を口頭で発表します。

1. 発表者の資格(応募資格)：

絵本学会の会員で、2015年度までの会費を納入済であること。新規入会者の場合は、2016年1月29日(金)の時点で入会手続きが完了していること。

2. 発表作品：

未発表の絵本(個人制作、共同制作とも可)

3. 発表形態：

判型・サイズ・頁数等は自由

原画を原寸でカラーコピーしたシートの全画面と、カラーコピーなどで製本したものを1冊出品すること。

4. 申し込み要領

①作品タイトル、②発表者の氏名・住所・電話 FAX 番号・メールアドレス、③所属機関名・職業など、④原画サイズ・枚数、以上の①～④について、文書化したものを絵本学会事務局宛に郵送またはメールでお届けください。

5. 申し込み期間：

2016年2月10日(水)～3月10日(木) [期間内に必着]

6. 発表者の決定：

作品発表は、原則として無審査とします。作品搬入の期日・方法、発表順・時間等については、4月末までにお知らせします。また、大会プログラム掲載用に、200字程度の作品紹介原稿を5月中旬に提出していただきます。これらの詳細は、第19回絵本学会大会実行委員会より連絡します。

【申し込み先】 〒164-8678 東京都中野区本町 2-9-5
東京工芸大学芸術学部 陶山研究室気付 絵本学会事務局
E-mail: office@ehongakkai.com

発表内容と当日の記録写真は、絵本学会 NEWS およびホームページを通じて公開されることがありますのでご了承ください。